COMP COMICS DX

銀河戦国群雄伝ライ

5

真鍋譲治

CD-7-5
角川書店

●真鍋譲治作品

天の神々たち	DRAGON COMICS
銀河戦国群雄伝ライ❶❷❸❹❺	COMP COMICS DX
ジャンクパーティ❶	DRAGON COMICS

●COMP COMICS DX

サイレントメビウス❶❷❸❹❺	麻宮騎亜
精霊伝説ヒューティー❶❷❸	大野安之
ドラゴンウォーズ	杉田淵山
エルデガイン❶❷❸	円 英智
イース❶❷❸	羽衣 丹
地球防衛少女イコちゃん❶	あさりよしとお

コミック
月刊コンプ
毎月26日発売 角川書店

角川書店
定価950円
本体922円

ISBN4-04-712022-7 C0379 P950E

COMP COMICS OX

銀河戦国群雄伝ライ

5

真鍋議治 ⓟ

CD-7-5

角川書店

Rei

by Joji Manabe

5

•ARTIST
JOJI MANABE

•EDITOR
NAOAKI ARAKAWA
ANRI KOMATSU
NAOKO OYAMA

•BOOK DESIGN
TETSUYA ASAKURA

•SPECIAL THANKS TO
MASAHIKO YAMASHITA
HIROYUKI HIRAYAMA
HIDEMASA IDEMITSU
YOSHIKI MORISHITA

戦国の銀河を生き抜く群雄たち

【竜我雷】 りゅうがライ

本編の主人公。その度胸と悪運の強さを狼刃に買われて一兵卒より師団長に抜てきされ五丈軍先鋒として南天に雪崩込む。新任師団長として最初は部下の掌握に苦労するがその指揮ぶりや、副将孟閣の協力により部下の不信感も薄らいでゆく。南天軍の前線を突破するや大暴れして要衝座王都に一番乗りを果たし、その勇名は敵味方に響きわたる。退却戦において正宗に一騎討ちを挑むが破れ、瀕死の重傷を負うが、その傷が癒えぬうちに、元宮廷勢力による反乱の鎮圧に出動し、たちまちのうちに制圧する。だが一方、身元を預かっていた紫紋姫にも、嫌疑がかかり、それを庇ったために一時的に官職を剥がれるなど、相変わらず破天荒な若武者である。

【大覚屋師真】 だいがくやしし

南京楼の豪商大覚屋の放蕩息子。普段は酒色に溺れ、甚だ評判が悪い。だがその知謀たるや史書、経書から兵法、天文、医学に精通した天才的な戦略家である。自分自身もその知謀で天下を動かすことを夢み、時を待つ。プライドがとても高く自分以下の者に対して容赦が無い。それ故その隠れた才能を知る諸侯からの度重なる招きを全て固辞している。やがてその南京楼に雷が赴任してくる。

【紫紋】 しもん

【麗羅】 れいら

敗将阿曹主禅の一人娘。皇室の血を引く唯一人の王女故に悲しい運命にもて遊ばれる悲劇の娘である。実の父阿曹主禅を雷に殺され、五丈に身柄を引き取られ、恩賞として敵でもある雷の元に預けられる。だが雷とはそれを乗り越え深い愛情を寄せ合う。その後も雷を陰に日向に支えていく気丈な娘である。

男勝りの五丈の王女。弾正という強大な権力を背景に我がまま放題である。雷

には興味を持ち、ちょっかいを出しては紫紋とよく対立する。彼女の考えでは五丈のいい男は全て自分の物らしい。

【雲海入道】うんかいにゅうどう

雷の長年の戦友。かつては高僧に仕える身分であったが大酒飲みが仇で宗門を追われた破戒坊主。だが雷にとっては最も頼りになる豪傑である。終始、雷と行動を共にし、時に暴走する雷を諫める役に回ることもある。

【太助】たすけ

雷と同郷であり、幼い頃から雷を兄として慕う。その小さな体に似合わず、雲海と共に各戦場を転戦、修羅場をくぐり抜けた強者でもある。終始、雲海と共に雷の側にある。

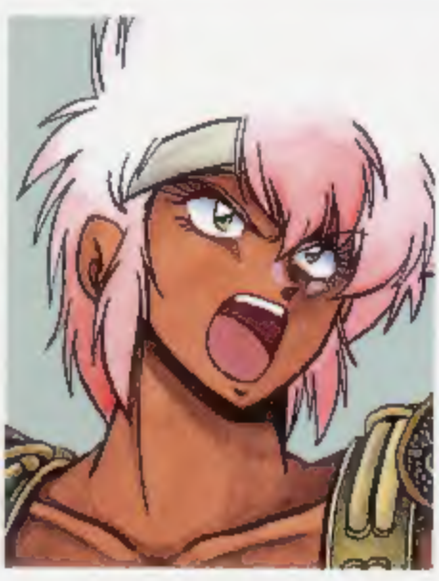
【孟閣】もうかく

4077師団の副団長。冷静で勇猛な豪将であり経験不足の雷を適切に補佐する。歴戦の強者であるが臆病風に吹かれた上官を殺すなど厳しい面も持つ。雷に将としての器があるのを見て、自分の主として雷を認めその覇業に重きをなす。

【比紀弾正】ひきだんじょう

元神聖銀河帝国左将軍。帝国崩壊後兵を挙げ、たちまちのうちに北天を制圧、その強大なカリスマ性によって配下に多くの勇将を抱えることになる。天下統一のために南天攻略に向かうが、用兵のまずさと正宗の戦略とによって目的を達することが出来ず、五丈に雪崩をうって退却する。位人臣を極めた弾正であったが、老いの衰えが忍び寄っていた。

【狼刃】ろうは



五丈四天王の一人。知勇を兼ね備えた女将であり、雷の才能を早くから見抜き、その行く末を暖かくかつ厳しく見守る。女傑正宗に刺激され南天進攻の先鋒を買って出て雷にその先陣を任し、麾下の第三軍を率いて南天に雪崩込む。勇戦奮闘するが補給が途絶え、正宗に包囲されて大損害を被る。戦後その責任を問われるが玄偉の諫言によって降格処分ですむ。

【骸羅】 がいら

五丈四天王の一人。身の丈2m以上の体格と怪力の持ち主。狼刃と共に弾正の旗揚げからの宿将。一騎当千の武将で各地を転戦、弾正の覇業に大いに貢献するが、南征においては勝手に進軍するなど軍令破りの常習犯でもある。玄偉、鳳鳴の二将軍とはそりが合わず、反目しあっている。南征後、弟である骸延、骸山と共に不穏な行動を取る。

【玄偉】 げんい

五丈四天王の一人で辣腕の謀臣。帝国崩壊後の戦乱の中、元帝国側の有力な武将であったが、早くに帝国の再興に見切りを付け弾正側に寝返る。彼が抜けたことによって旧帝国側はたちまち戦意を失い弾正に下ることになり、玄偉はその功により弾正に重く用いられる。南征には五丈軍本隊として進撃し弾正に南天からの早期撤退を勧める。その才覚故に他の将軍達とうまくいっていない。配下の華玉と共に権力の簒奪を企んでいる気配がある。

【鳳鳴】 ほうめい

五丈四天王の筆頭将軍。序列上では弾正に次ぐナンバー2の地位にある。冷酷な性格で五丈軍の多くの将兵を管理している。玄偉の台頭を恐れ、狼刃、骸羅を誘い玄偉失脚を狙うが未だ果たせずにいる。

【骸延】 がいえん

骸羅三兄弟の末弟。武勇一辺倒の兄達とは違い、華玉と共に李張の元で学んだ知謀の士であり将来を嘱望されていた。兄骸羅の武勇を背景に天下取りを画策し、麗羅を担ぎ上げ五丈中枢を乗っ取る。無類の権謀家である。

【三楽斎】 さんらくさい

南京楼軍の武将。主人運が無く、自分の出世のために各赴任地を転々とする。その処世術のために孟閣らにはよく思われていないが、彼自身極めて有能な官僚であり、弁舌の才をもって雷を補佐する。

【独眼竜正宗】 どくがんりゅうまさむね

父先代正宗の死後弟虎丸を擁して智の国

の国政を司る。女将ながらその戦略、行動力で、南天連合軍の盟主として五丈の南征を頓挫させる。戦後、南天最大のライバル明を攻め滅ぼし残る趙、孟を併合し、練にも服従を強いる。渋る羅候に虎丸の義兄になることを勧めるなど硬軟を使い分け、事実上南天を統一する。

【虎丸】とらまる

正宗の弟だが幼いので国政には関与していない。姉譲りの闘志の持ち主で勝手に船に乗り込み雷に一刀を浴びせたりする。

【飛竜】ひりゅう

正宗の側近で知恵袋。親衛隊長として常に正宗の側にあり、犬馬の労を惜しまない。弾正の南征においても的確に正宗を補佐し、雷の猛攻より正宗を守り抜く。弾正の余命の短い事を予見した。

【羅候】らこう

練国国王。父羅鶴の死後、兵権を受け継ぐ。敵である狼刃を付け狙い、守ろうとする雷と一騎討ちを繰り広げる。戦後、正宗の服従の命を受け激怒するが、時我にあらずと考え南帝閣に赴く。後に雷と共に竜虎と並び称される。

【姜子昌】きょうしょう

練国きっての名将。羅候の身辺にあり、いわゆる竹馬の友である。若いときから練の麒麟児としてその才能を高く買われていたが智との同盟に反対して先主羅鶴を強く諫めすぎたために謹慎させられる。羅鶴の死後復位し、練軍の中核として羅候を支えて活躍する。

【華玉】かぎょく

玄偉の腹心。李張道師の高弟でその秘め

られた力で玄偉に適切な助言をする。弾正の死期を予測し、玄偉を天下人にするため、暗躍、同じく骸羅の知恵袋の骸延としのぎを削る。その行く手を遮る者を闇から闇へと葬り去るのも彼女の役目であり、後に雷の追い落としをも画策する。

【李張】 りちょう

弾正の元軍師。弾正の挙兵と同時に弾正に軍師として迎えられ、その覇業に大いに貢献。引退して隠居生活する今も、五丈軍に対して隠然たる力を持つ。その弟子には華玉、骸延など知謀の士が多い。

【蘭々】 らんらん

華玉の妹。共に李張の元で学ぶ。道士としての能力は未知数だが今は紫紋の元で身の回りの世話をしている。幼い割にはしっかりしていて、荒くれ者の印象がある雷の元に嫁ぐ紫紋の身を案じている。

【大覚屋曹真】 だいがくやそうしん

南京楼で一、二を争う豪商であり、雷が赴任するまではその財力で南京楼の政治を思うがままに操っていた。正宗ともつながりがあるなど商人ならではの一面もある。師真、英真の厳しい父親である。

【大覚屋英真】 だいがくやえいしん

師真の四つ下の弟で大覚屋の跡取り。兄師真のような縦横無尽の才略には欠けるものの、その思慮深く、篤実な人と為りで多くの人から一目置かれる。兄師真の実力を知る数少ない理解者である。

【呂斎】 りょさい

五丈軍の重臣。弾正の元で中軍師、尚書を歴任、武官の勢力が強い五丈陣営の中、文官の筆頭として重きをなす。

【朱金将】 しゅきんしょう

雷が赴任する前の南京楼の大守。要衝の責任者とはとても思えない小役人である。着任した雷と激しく対立する。

なに
骸羅軍が？
はっ
国境を侵し
町々を焼き払いながら
進んできます
服を！
はい
どう思う
飛竜？
規模・進撃速度
からみて
単なる威力行動の
ように思えますが

おいっ
正宗公は
どこだ!!
ああ
入ってはなりません!
これより先は
寝室でございます
そんなこと
言ってる
場合か!
どけぇっ!!
正宗公!!
ばっ!!
まさむ…

なんだ
こんな時間に
バ…バカ野郎!
着替えて
いるなら
そう言えって!!
なんだよ
初めて女の
裸見るわけじゃ
あるまいし
そーいう
問題じゃねえ!!
待たせたな
どーした
血相変えて?
五丈国境で
何かあったのか?
いや ちょっとした
小競り合いが
あった
鞍羅軍が
侵攻してきてな
やっぱり
道理で…!!

何か
あったのかい？
南蛮軍だ！
連中が最近
やたらと練の国境を
侵してるって知らせが
国元から
たった今届いた
連中とは
親父の代から
うまく
つき合ってたのに
今頃になって
どーしてと
思ってたが
そうか
五丈と通じて
やがったんだな・・!!
きっと俺に
親父ほどの力が
ねえもんだと
なめてやがんだ!!
俺は明朝
国に帰る！
かまわねえな!!
いいとも
ただ我々の
敵は五丈だ
ほどほどに勝って
従がわせるのが
良策だぞ
へっ
練に羅候ありと
骨の髄まで
わからせてやらあ
じゃあ
骸羅の方は
まかせたぜ!!

相変わらず
騒々しい奴だな
御意
飛竜
今の南蛮軍の話
事実だと
思うか？
御冗談を
子供でも
書ける作り話
ですよ
しかし
わかっていて
なぜ行かせた
のです？
止めたところで
あの男は
ドアを蹴破ってでも
出て行くぞ
それにこれは
羅候の考えじゃ
ないだろうしな
おそらく
智に与するのを
嫌う 国元の
重臣達でしょう
練に未だ
同盟反対論者が
いるのか？
皆
こっちの根回しが
行き届いて
いるはずだが
残念ながら
一人残っています…
しかも手強いのが

将軍
姜子昌が!!
姜子昌?

将軍
若君の御召し艦が
国境を越えます
追尾してくる
艦はありません
ふん
正宗の奴
意外と素直に
殿を帰して
くれたな
一戦は
覚悟して
いたが…
接紘用意！
接紘
用意！
接紘
用意！
将軍姜子昌
どーいう
男だ？
は
若いが
なかなかの
切れ者です
羅候殿の
無二の親友と
聞いています

この度の南天連合に加わることに一人反対し先主羅鵠公を強く諫めたため怒りを買い蟄居謹慎させられたとか…
その男が復帰したということか
しかも他の重臣達を説き伏せたとなると…
練の国論が強硬論になったということです
ふむ…
練との関係今まで通りにはいかないようだな
しかし練という駒はまだ必要だ
飛んで行く凧には重しをつけよう
は…
その重しだが…

なに――っ!!
南蛮軍襲来は
作り話だと――っ!?

どーゆうことだ
これは!?
姜子昌
説明しろ!!
はっ
申しわけありません
何事も若君の
ためを思い
あの様な作り話を
お知らせしました

俺のためだと…!!
はっ
正宗の奴
若君に子守りを
押しつけ
事実上
監禁状態・
さぞかし
御苦労があったで
ございましょう

虎も檻の中では小猫同然！
やはり大地を自由に駆け回ってこそ 猛虎と言えますからな！
…で俺を連れ出す口実を作ったと言うわけか
とはいえ若君を謀ったことはこの姜子昌の不徳のいたすところ
存分に処分くだされ
よせよ俺の性格を一から十まで知ってるおまえだ
そんなことしねえってことぐらいわかってるだろ
これは…
それにしても久しぶりだな姜子昌

はっ
殿も
お変わり
なく!!
よーし
久しぶりに
国の土を
踏めるし
親友にも会えた
ことだ
早速
そいつを祝って
飲もうぜ!
二人だけでな!!
いいですな
では
殿のお帰りを
祝して…

おいおい
いつまで
それやってんだよ
臣下の礼をとる
必要なんか
ここじゃねえよ
いつも通り
羅候でいいぜ
そーだな
正直言って
このしゃべり方は
しんどいな
じゃあ
羅候
どうだった
正宗は？
いい体
してたぜ
おまえ
まさか
正宗と…
バカ野郎
ちらっと見た
だけだ
ちらっと!!
そうだな
なんて言うか
まあ
一大英傑には
違いねえなあ
女のくせに
あっぱれと
言いたくなるぜ

俺が見たところじゃ部下をしっかり掌握してるし民百姓には心服されてる
家臣の中にも勇将は五万といやがるしな敵に回したくはないぜ
かなわねえか？
そうは言ってねえ！正宗にはスキがねえっていってんだ!!
正宗にはなくとも智の国には欠点がある
なに？
聞かせろよ!!さあ早く!!
なんなんだ!?
バカ落ちつけ!!
いいか智の国主はあくまでも弟虎丸であって正宗は後見役にすぎん
だがその正宗は今や智の全権を握り人望も高い
名目上の国主と兵権を握る権力者は必ず対立するな特に虎丸が元服すればだ！

虎丸も
分別のつく年に
なれば
必ず自分の立場に
気付く

家臣団も
姉・弟の二派に
分裂するはず…
その時がチャンスだぜ！

にしたって
ずい分先の
話だな――

時を待つのも
戦略だぞ

けど
そこまで
待てるのかよ

練が
五丈と智の
二大強国の中で
生き残れる
のか？

ジリ貧
だぜ

五丈も智も
我が練を
抱き込みに
かかってくる

つまり
天下のバランスの
要は練なんだ

そいつを利用し
二国を牽制し
時をかせぎ
戦力を蓄えりゃ
いい

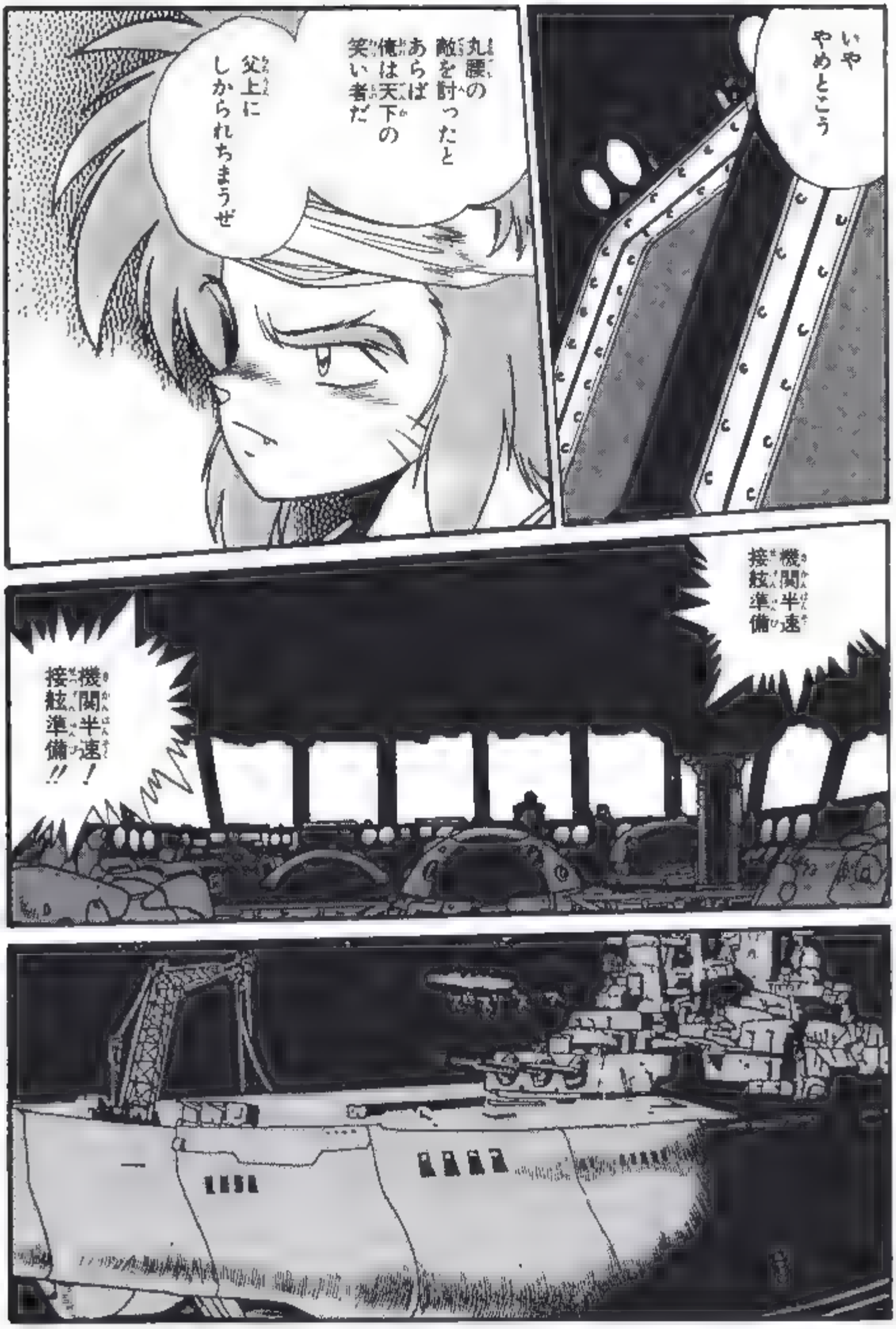
ちょうど
おまえに
会わせたい奴が
益州都に
来ている
骸羅軍の使者
だぜ

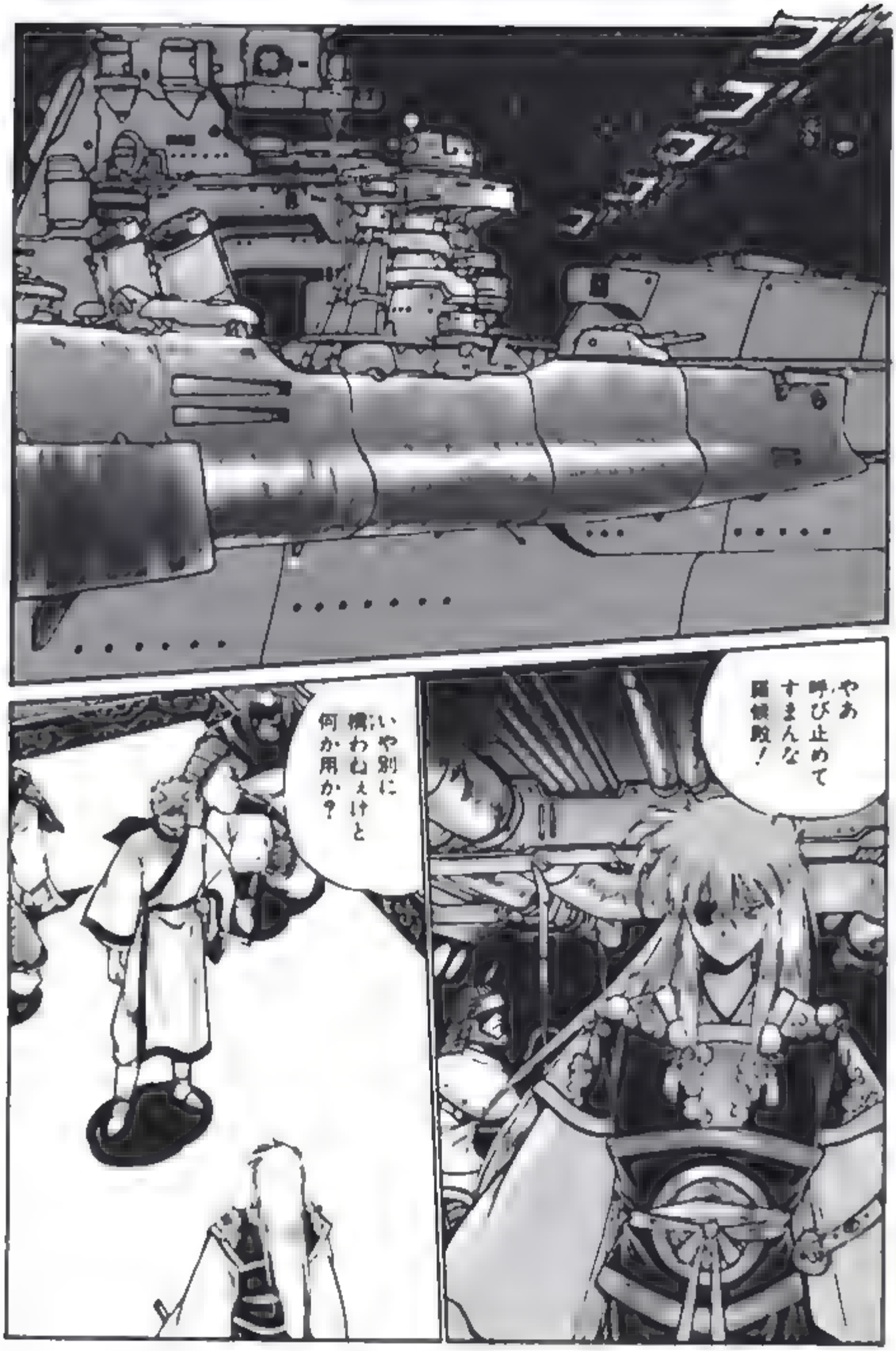
骸羅軍の？

※練の国都

申し上げます！
なんだ
後方より高速艦が一隻我々を追ってきます！
なにいっ〃
警戒態勢！
距離4万2千！減速しています！
あっ発火信号です
停船セヨ我、正宗ナリ！

正宗だと!!
たった1隻で
何しに
来たんだ!?
他に艦は
いないか!!
全方位
艦影なし
後方の
1隻のみです!
どう思う
殿に足かせでも
しに来たんでしょう
虎を野に放つのは
やはり恐いらしい
撃ちますか?
!!
正宗は
たった1隻
しかもここは
練の領海
たやすく
討ち取れます
……

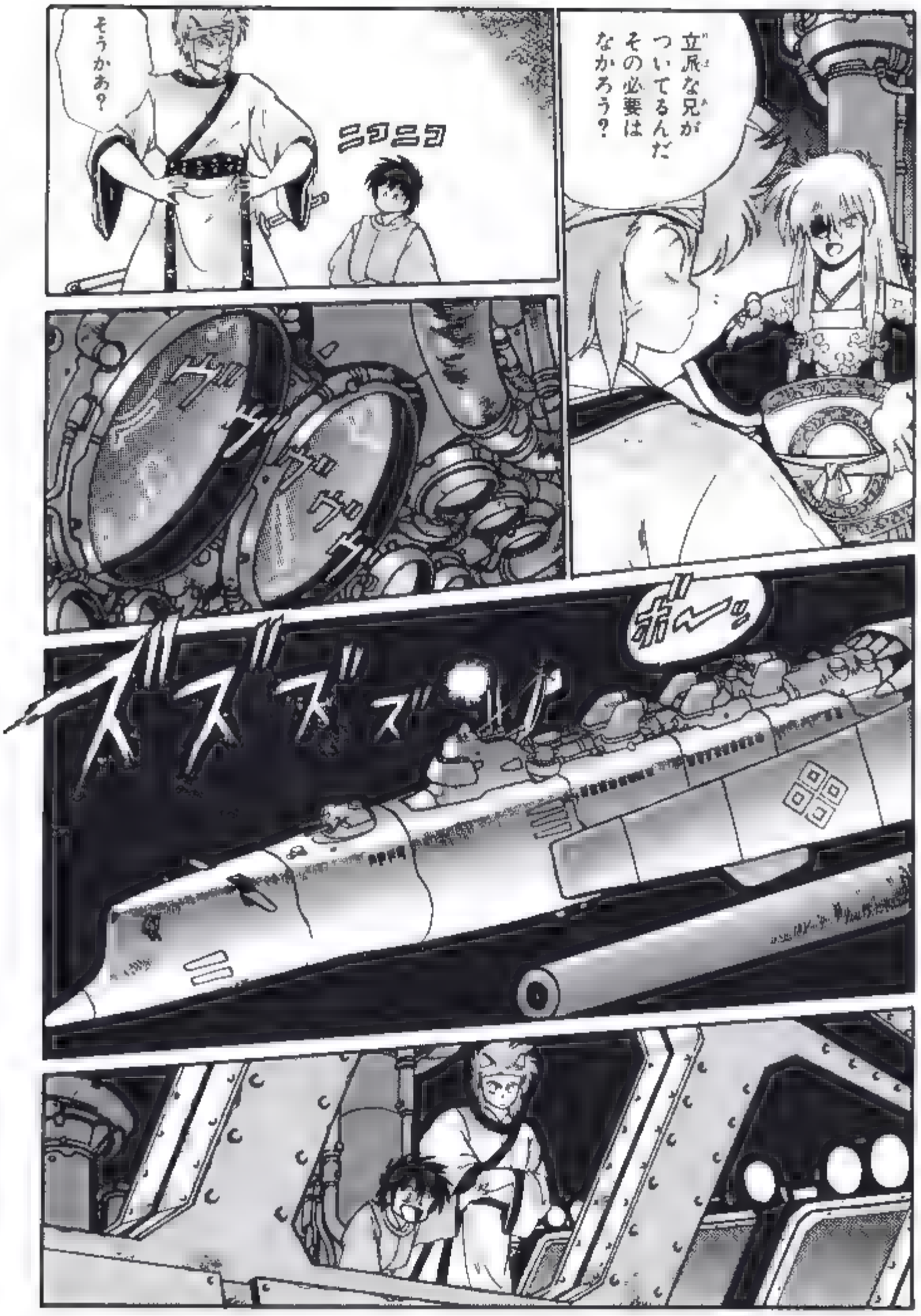

いや
やめとこう
丸腰の
敵を討ったと
あらば
俺は天下の
笑い者だ
父上に
しかられちまうぜ
機関半速
接舷準備
機関半速！
接舷準備!!


ゴゴゴ

いや何
大したこと
じゃない
この度の
南蛮討伐に
ぜひ 弟虎丸を
連れていってほしい
ちぇ!!
え?
やはり……
兄上
ひどいよ――!!
ぼくに何にも
言わないで
行っちゃう
なんて――っ!!
ああ
スマン
急いでたんでな
どうだ
羅候殿
邪魔かもしれんが
この虎丸に
兄たる男の
戦いぶりを
見せてやっては
くれまいか?
おぬしなら
安心して
まかせられ
よう

ねえ 兄上
ぼくも連れてってください
兄上の戦いぶりが見たい
あー
わかった
わかった
ついてこいって
やったー
いや
この正宗の
無理な願い
聞き入れて
いただき
感謝する
おとなしくしてろよ
わかってらい!
さすがだな
殿の性格を
よく知っている
殿は決して
虎丸を人質に
したりする男では
ないと
そいを知って
自分の弟を
足かせの鎖に
使うとは
恐るべし
正宗

羅候殿
あちらの
大将は
どなたかな
ああ
姜子昌と
いって
俺の親友さ
ほう
おぬしが姜子昌殿か
うわさは色々
聞いている
練国軍随一の
武将だそうだな
もったいない
お言葉
身に余る
光栄です
羅候殿に
とっては
鬼に金棒と
いうわけだ
姜子昌殿にも
お願いいたす
虎丸に兵法の心得の
一つでも教えて
やってくれぬかな
はっ
いや
わざわざ
追いかけて来た
かいがあった
それでは
羅候殿
虎丸を
まかせたよ
おいおい
こいつ一人だけか
お供かなんか
つけねえで
いいのかよ

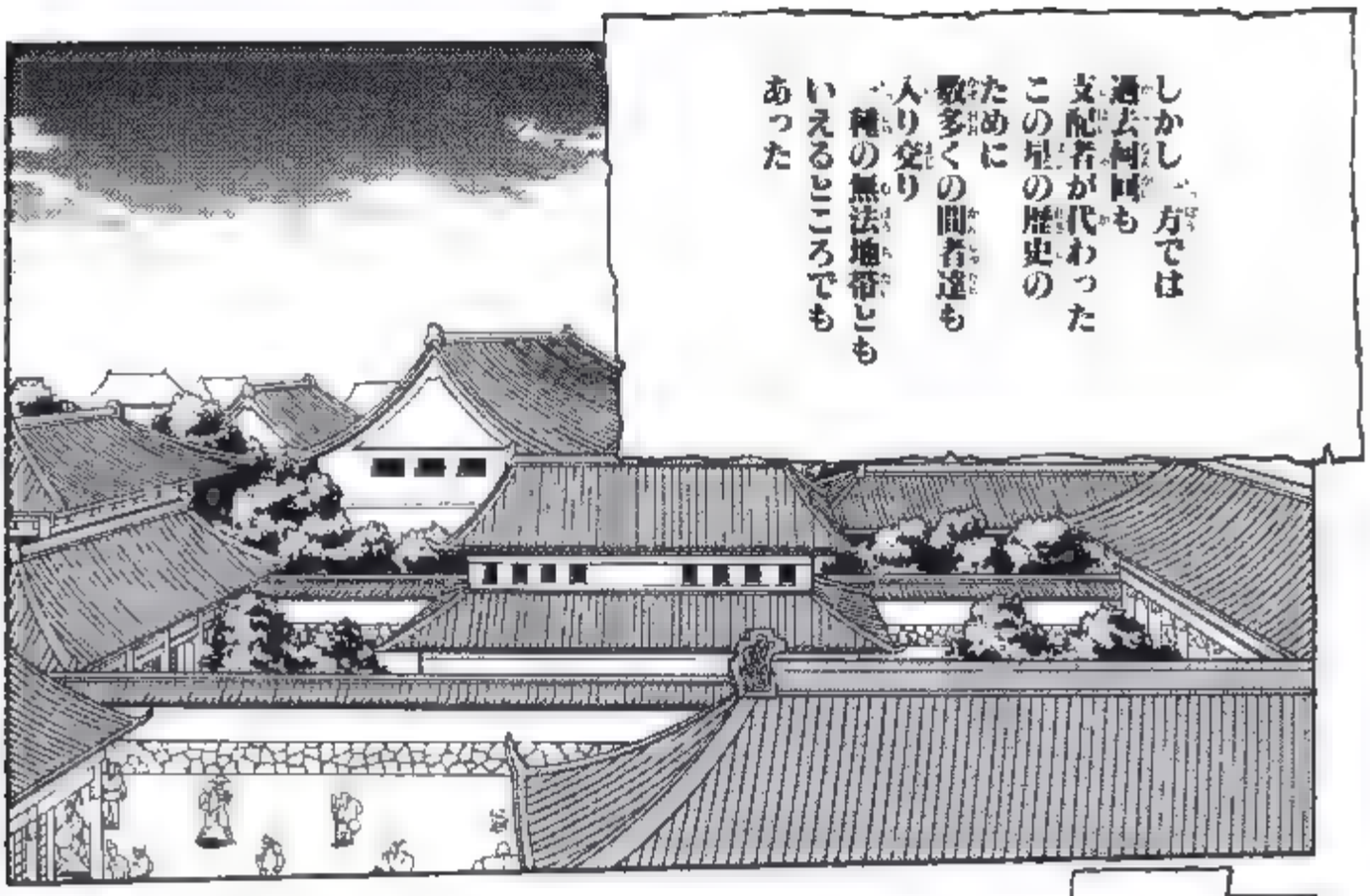

立派な兄がついてるんだその必要はなかろう？
そうかあ？
ニヨニヨ
ゴゴゴゴ
ズズズズ
ボ～ッ

こいつ…
やはり我々の敵は
ただ…
ものに…

五丈国 南京楼

この南京楼は五丈と南天の国境に在り平和時には南北交易の中心にもなる要地であった

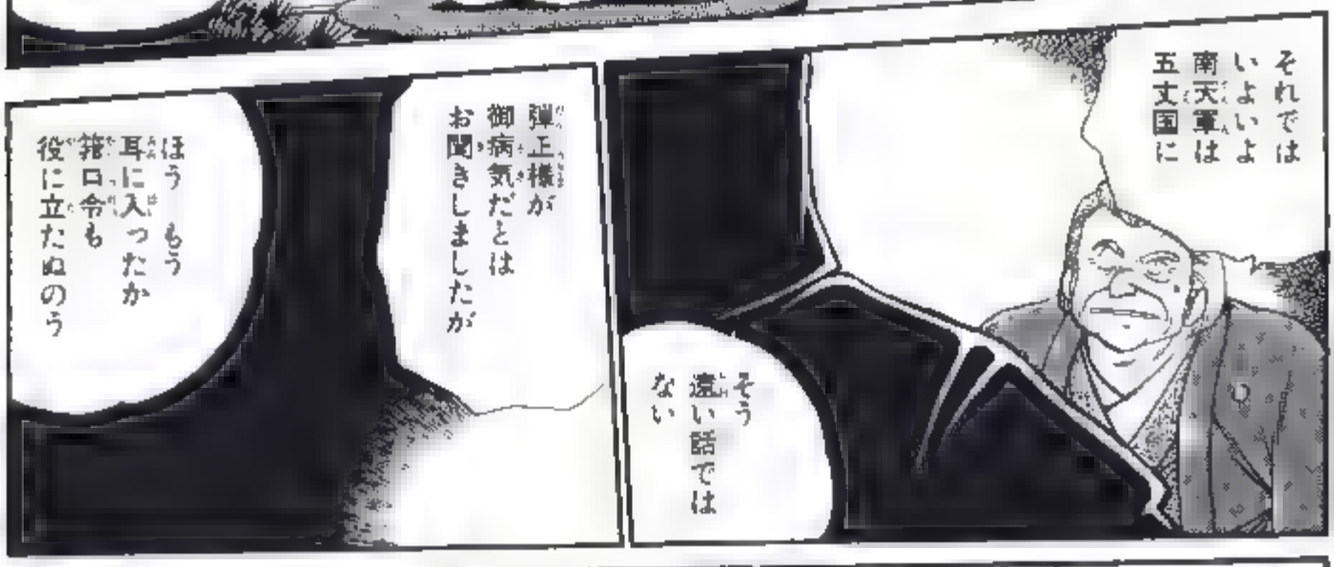
従って多くの商人がここに屋敷をかまえ莫大な富を蓄えていた


しかし一方では
過去何回も
支配者が代わった
この星の歴史の
ために
数多くの間者達も
入り交り
一種の無法地帯とも
いえるところでも
あった

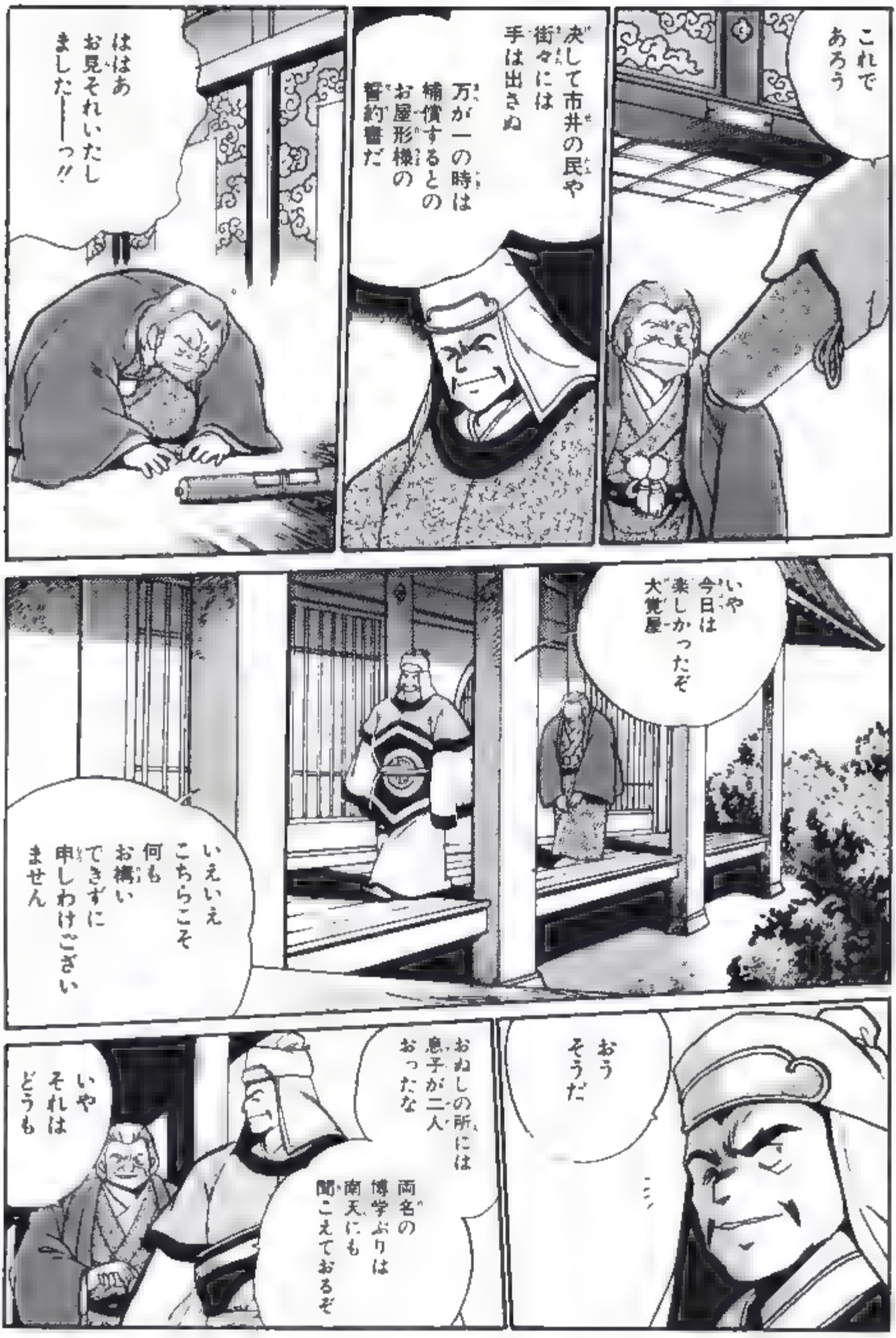
豪商
大覚屋
おうおう
いつもながら
見事な
庭ですな

この庭を見る限りではそちの商いはうまくいっているようじゃな
ははっ恐れいります
これも全て南天大将軍正宗公の恩徳があればこそでございまする
大覚屋書真
これは些少ですがお収めくだされ
うむいつも悪いな
いえいえこれも天下のためでございます
ところで今日参ったのは他でもないこの町の顔役でもある そちに頼みがあってのう
はっなんなりとお申しつけくだされ

ここ南京楼は
おぬし達
二十六人の
商人の合議制で
実質上
統治していると
聞いておる
そこで
我がお屋形様は
おぬし達の
財政的援助を
願いたいと
申してな
もちろん
智の天下統一が
なった暁には
重く恩賞を
なすであろう

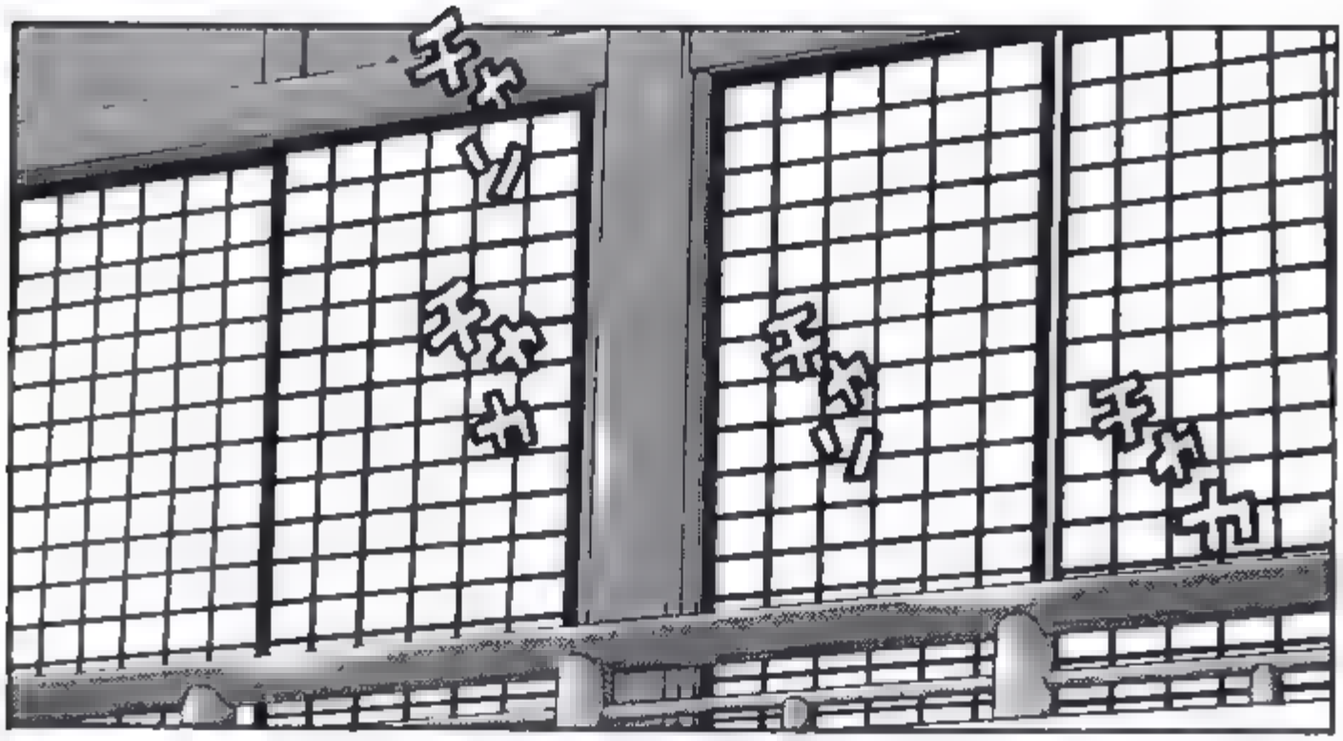

それでは
いよいよ
南天軍は
五丈国に
そう
遠い話では
ない
弾正様が
御病気だとは
お聞きしましたが
ほう
もう
耳に入ったか
箝口令も
役に立たぬのう

我がお屋形様は
弾正の死後
暴君の出現を
予見しておられる
まあ
これ以上詳しくは
話せぬがな
それについては
一つお願いが
あります
ほう
何かな
我々
街々を焼かれて
しまっては
商いが
出来ません
それで


これで
あろう
決して市井の民や
街々には
手は出さぬ
万が一の時は
補償するとの
お屋形様の
誓約書だ
ははあ
お見それいたし
ました――っ!!
いや
今日は
楽しかったぞ
大覚屋
いえいえ
こちらこそ
何も
お構い
できずに
申しわけござい
ません
おう
そうだ
おぬしの所には
息子が二人
おったな
両名の
博学ぶりは
南天にも
聞こえておるぞ
いや
それは
どうも

どうじゃ
二人のうち
跡取りではない
次男の方を
お屋形様に
仕えさせて
みないか
あ――
いえいえ
お待ちください
実は
この店を継ぐのは
次男の方と決めて
おりますので：
長男の方
なら…
これは意外
長男は後を
継がぬのか？
はあ
あやつときたら
全く商売に興味が
ありませんので…
はっはっはっ
まあよいわ
一度
会わせて
もらえんか
は
喜んで
正家公のお側に
仕えるとあらば
出世間違いなし
やっかい払い
どころか
我が家の名も
上がるわ
おいっ
だれか
師真を
呼んでまいれ!!
パリ

旦那様
申しわけありません
若旦那様は
お出かけのご様子です
なに
どこへ行った!?
すぐ連れてきなさい!
それが
!!
またか
〃
どうなされた
大覚屋
御子息は
とこにお出かけ
かな?
近くなら
わしの方から
参っても
よいぞ
あ
いえ
その
とても
儒学様が
お出になられる
ところでは…
ほ——う
わしが行けぬ様な
ところに出入り
しておるのかな?
は
はあ
実は
その
色街で


チャンチャン
チャンチャン
チャンチャン

あっはっはっは
いいぞ――っ!!
もっとやれ――っ!!!
色っぽく
ねえぞ!!
もっと腰ふれーっ!!
女将!
酒も女も
まだ足りねえぞ!
じゃんじゃん
持ってこい
女共も
取っかえひっかえ
だぜ!
はいはい
若旦那には
いつもお世話に
なります
ほら
若旦那も
一緒に踊り
ましょうよ
おいおい
こりゃ
まいったな♡

若旦那
お上手ーっ!!
素敵よー!!
わはは
捕まえたーっ!!
いやーん!!
うおっ
いいしり
してんな
おまえ!!
なでなで
あーれ——
若旦那ったら
まだ陽は高い
ですわ

いや
その照れた
顔が
素敵だ！
あ
あの日
あの日に
弱いのよ♡
あーん
若旦那
好きにしてーっ!!
あたしも
——っ
抱いてーー
チャイ♡
チャイ♡
よーし
よしよし♡
西北内林!!
わ——ははは
今日はとことん
やるぞーっ!!
腰がぬけるまで
やりまくりだ!!

若旦那
お客様
ですよ

客？
親父の店の
者か――？

いえいえ
結構身分の
高そうな
御武家様の
ようですが

返せ
返せ――っ！
こっちは
いそがしいんだ
第一
武家なんかに
知り合いは
ねえよ！

はあ
しかし
お帰りには
なられないような
御様子ですが

ごめん

大覚屋師真殿でござるかな?
だれでえてめえ?
なかなか豪勢にやってるようですな
遊びっぷりもお見事だ
うっせえな!
だれだと聞いてるだろ!!
これは申し遅れた
わしは南天大将軍正宗公の家臣儒李と申す者でござる
正宗?
正宗ってあの独眼竜のことか!?

いかにも
ほ――う
その正宗の家臣が
南京楼まで
何しにきたんだ
また
親父に
金の無心か？
……
恐い顔してるとこ
見るとズバリの
ようだな
その手間賃
代わりに
俺をつれてこいと
頼まれたのか
親父に？
女共は
はずして
もらえんかな？
それがだめなら
場所を変えて
いただきたい
やだね――
あんたこそ
はずしなよ
ここはあんたらには
似合わねえよ
それでは
ここで話そう
どうかな
我がお屋形様に
仕える気はないか？

お屋形様は
広く賢人を
お探しだ
この銀河を
統一するには
力だけでは
いけないとな
何事も
人が必要
なのだ
君の父上は
喜こんで
お仕えさせると
申しておったが
君自身は
どうかな?
もちろん
相当な高位と
俸禄は
約束されよう
天下の
参謀となり…
や——だ
ね!!
お気に
召さぬか
仕官することが?
俺は女の元で
働くのは
ゴメンだと
いってんだ!!

女だと
だめだと
申すのか！
あったりめえよ
この師真
女の上には乗るが
下に仕える気はねえな！
それは
おぬしが
正宗公の偉大さを
知らぬからだ！
とこが？
そこらの
ゴロツキ共の
大将だろうが
戦争ゴッコに
のめりこむ女
なんか異常だぜ
女ってのは
こう
かわいくなきゃあ
なー♡
な
なんたる
暴言〃
この
色狂いが〃
もうよい！
本来なら
無礼討ちにでも
してくれようが
今日だけは
見逃してやる〃
帰れ
帰れ

この時
大覚屋師真
二十四才…

ただの
放蕩息子で
あった

弾正が倒れて
一月
病は日に日に
悪化していった
武王都

おう
御典医殿
殿のご容体は
いかがかな？
これは
呂斎様
正直申しまして
あまり良くは
ありません
長くお話しに
なりませぬように
わかった
とにかく
お見舞いいたそう

殿
呂斎でございます
おお
呂斎か
話がある
近う参れ
麗羅
少し席をはずしていなさい
は――い

呂斎よ
これから言う
ことは
わしの遺言として
聞いてくれ
殿
そのようなことは
申されますな
天下はまだまだ
殿を必要として
おりますぞ
いや
どんな名医が
みても
いっこうに
よくならん
おぬしとは
わしの旗揚げ
前からの
つき合い
今までの
つき合いを思うて
後事を託したい
ははっ
もったいなき
お言葉
知っての通り
わしには
息子はおらぬ
一族郎党みな
討ち死にした
世継ぎが
おらぬことは
わしの死後
必ず混乱を
招こう

これ以上の戦乱はわしの望むところではない
そこでだ…
わしは正宗に国を譲ろうと思う
な…なんと〃
殿！恐れながらそのお考えには賛成できませぬぞ〃
確かに殿に男子はおりませぬがこの広い天下の中に必ず御一族の血を受け継いでいる者はおりましょう！
その者を立て我々家臣一同が盛り立てれば天下盤石でございまする！

わしも
あと10年
生きられるなら
それも
考えたろう

だが
それには
充実した官僚体制が
必要じゃ

おろかな王で
あっても
幕僚がしっかり
しておれば
国政も安泰じゃ

だが今の五丈では
それは無理じゃ
わしは戦に追われ
国内の官僚機構を
整えることは
できなかった

今からでは
時間がない

五丈には
まだ専制君主が
必要なのじゃ

自他ともに認める
実力者が！

それが
正宗と・・・

王道を
歩む者同士だ
あやつのことは
よくわかる

呂斎よ
これが
わしの遺言じゃ
正宗に
それを渡し
わしの死後
天下に公表せよと
伝えい
おぬしを
信じて
あずけて
おくぞ
そこまで
お考えとは…
わかりました
もはや
何も申しませぬ
この呂斎
命に代えても
殿の御意志を
お守りいたします
もはや
五丈だ南天だと
いう時では
あるまいて…
万民の望む
太平の道が開ける
ならば
わしは喜んで
国を譲ろうぞ

もう下がってよいぞ
少し疲れた
今のことおぬしの胸のうちだけにとどめておいてくれ
はは殿もお体を大切に

あ——あ
俺もバカだよな——あんな女のために牢の中にいるなんてよ
ほんとけとばしたいぐらいの大バカだぜ！
あんな女のためによ

竜我雷
出ろ
へっ
うるせえな
なんだよ
強制労働にでも
駆り出す気かよ
俺はここが
気に入ったんだ
どこにも
行かねえからな
き
きさまーっ!!
わわっ!
なんだ!
なんだ!

そんなに牢が
気に入ったんなら
一生入ってても
いいんだぞ
狼刃将軍!!
ったく
どーしようもない
悪ガキだな
おまえは
ついて来い!
殿がお呼びだ!
殿が?
ぐずぐずするな!!
なんだよ
いやに
おっかねえな

な――
殿が俺に
何の用なんだよ
知らん！
なんでえ
さっきから
何怒ってん
だよ
知りたいか？
ヒロ
いってえな！
何しやがんだよ!!
やっかましい！
ったく
毎度毎度
騒動を起こしおって
～～!!
おまえには自覚と
いうものがないのか!!

ん？
な　なんだ
おまえ
えらく
臭うぞ
しょーがねえだろ
一月もぶち込まれて
たんだぞ
風呂になんか
入れっかよ！
ポリ
ポリ
そんなんで
殿の前に
連れて行けるか!!
こい！
洗ってやる!!
洗って
やるって…
わーっ!!
冷てーっ!!
せめて湯
わかしてくれよ
文句が多いぞ
時間がないんだ
ぶっ!!

さあ 全部 脱げ！ 下もだ！
えーーっ!!
何考えてんだよ！ スケベが！ 年下の男を ひんむくなんて 趣味悪いぜ
はっ まだまだ おまえのなんか 子供だよ 子供！
何ーーっ！ いいやがったな!!
そこまで言うなら見せて
や
おーっ!!
つ〜〜っ!!
よーし そのまま 動くなよ
うごけるかよ…

いてててて〜〜!!
わ——っ
やめろって
変態!!
きゃーっ!!
うるさい
今度は
前だ!
こっち向け!!
鬼!悪魔!!
オムコに行けなく
なるーっ!!
いつつつ…
ま〜〜だ
ヒリヒリ
しやがる
将軍
絶対に嫁に
行けねーぜ!
ダンナに
あんなこと
したら
いて!!
余計な
お世話だ
汚いもの洗うには
あれが一番なんだ

殿！
竜我を
連れて参りました
ちゃんと
頭を下げろ！
わかってるよ！
相変わらずだな
竜我よ
近う参れ
話がある
はっ
おぬしも
殿 無理は
なりませんぞ
わかって
おる
この
哀えよう…
これが天下の
覇者の
姿かよ……

どうした
思ったより
衰えていると
思ったか
え
いえ
そんな…
まあよい
そうだ
確かに衰えた…
老いるというのは
寂しいものじゃ
わしも
おまえぐらいの
歳の頃は
若さにかまけて
無茶をやった
ものじゃ
営倉に
たたき込まれた
ことも
ある
えっ
殿も！
うれしそうな
顔をするな！
用というのは
これじゃ
えっ
俺を
第一近衛軍
騎都尉に!?
そうじゃ
四〇七七師団を
中心に 新たに
5個師団をまかす

5個師団
10万もの兵を
〃 すげえっ
竜我よ
もっと近う
よれ
はっ
よいか
おまえに
近衛軍を
まかすのは
他でもない
わしの亡き後
必ず天下は
麻のごとく
乱れよう
この五丈本国
からも
必ず逆賊が
現れる
わかりました!
そんな連中
生かしちゃ
おきませんよ!
それと
もう一つ
魔羅の側にいて
あいつを守って
やってくれ
もちろん
近衛軍司令と
してじゃ
いっ〃

そう嫌な顔をするな
この間の騒ぎは聞いておる
あいつは自分の感情を押さえようとはせん奴でな
はあ・
わしは息子を女達の跡目争いで全て失った
子供といえば娘の麗羅だけだ
よいかわしの亡き後娘をまき込んだ権力争いがあるやもしれん
暗殺の危険もあろう娘もおぬしには気を許しておる守ってやってくれ
はっ
ふうよく言ってくれたなこれでわしも安心じゃ
殿……

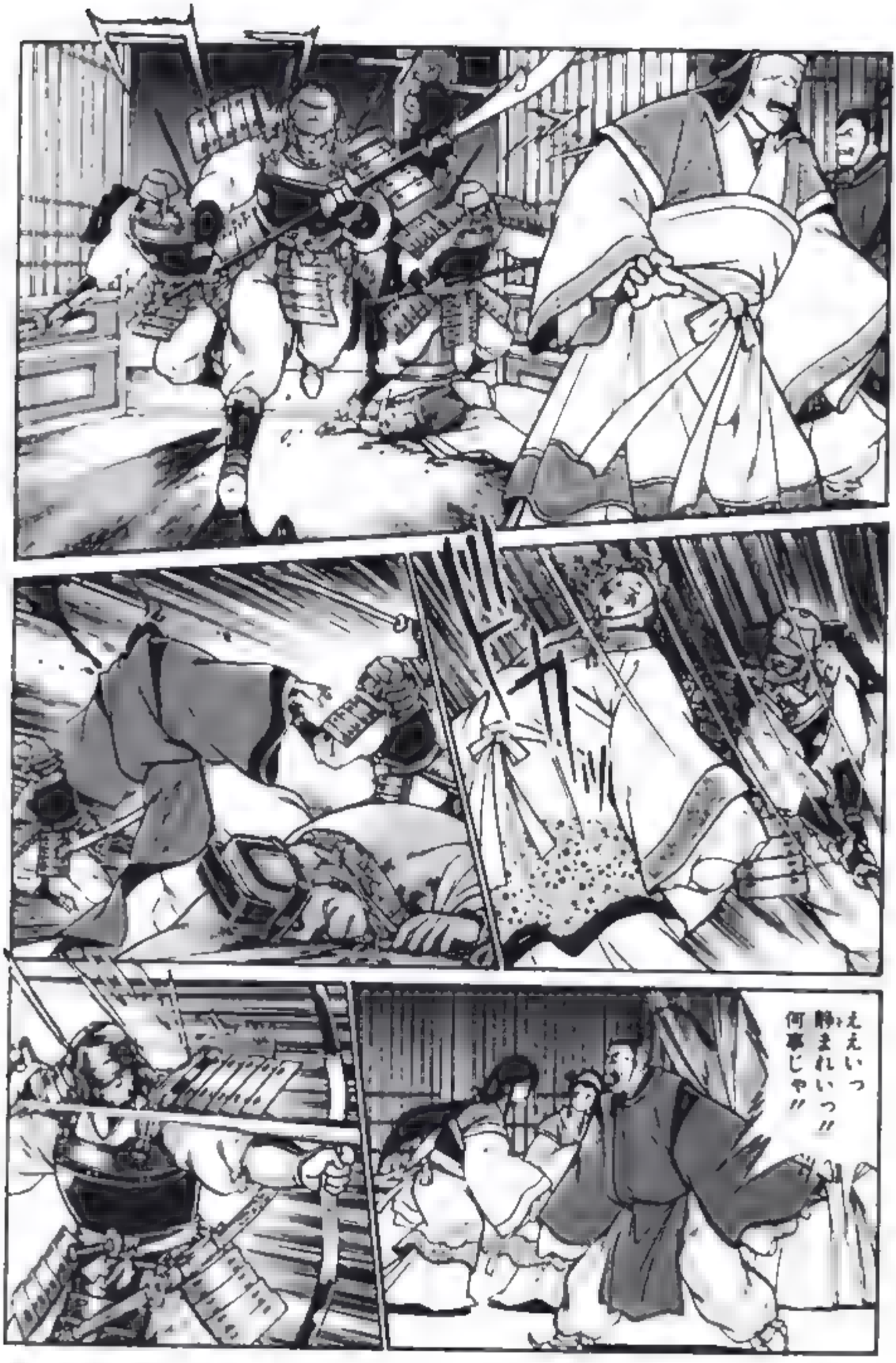
へへ――
5個師団かー
なんかこう
重みって
いうか
ズシッと
くるな――
明日からすぐ
再編成に
かかれ
装備の
引き渡しは
明後日からだ
引き継ぎやら
なんやらで
当分は書類の山に
埋もれることに
なるぞ
あ
そーいうのなら
孟閣が
いるから
大丈夫だぜ
俺
署名する
だけ
しかし
おまえも
悪運が強いな
え？
騒ぎを
起こすたびに
出世してるじゃ
ないか
そういうのを
悪運って
いうんだ

いいか
こんどは
10万の……
わかってるよ
自覚してるって！
ま
悪運も
運のうちだ
そいつは
大切にするんだな
へ？
本来なら
出世祝いと
いきたいところだが
おまえには
待ってる人が
いるからね
そ――だ
姫さん・
姫さんは
どーなったんだ!?
ほ――
やっぱり
気になるか
バーロ――
そんなんじゃ
ねえよ!!
安心しな
あれから
ずっと李張道師の
ところで
お世話になってる
はずだ
今頃はもう
おまえの
家で
おまえの
帰りを
待ってる
だろーよ
俺の帰りを？
けど俺
兵舎で

命令だ！
今日は
家に帰って
姫様に
顔を見せてやれ！
いいな!!
え――っ!!
こーの
あたしの命令が
聞けないのかい!?
あ――
わかったよ
帰りゃ
いいんだろ！
帰りゃ!!

それっ!!
殿より
御遺詔を
たくされはしたが
五丈は
四天王を
始めとして
軍閥の力が
強すぎる…
どうやって
彼らを
説きふせる
べきか
やはり
殿に帝位に
おつきに
なっていただき
銀河帝国を建て
正宗を大将軍に
任命するしか
手はないが
しかし
殿の
御容体が…

ふう
考えれば
考えるほど
むずかしいのう
しかし
やらねば
ならん
殿の亡き後
必ずや天下は
乱れる
戦乱の世は
終わらせねば
うん!?
何事じゃ
?
呂斎様!!
どうしたと
いうのだ!!
や
屋敷内に
何者かの兵が
侵入して


ええいっ
静まれいっ!!
何事じゃ!!

いたぞ〃
くさまら
呂斎はおったけ？
はっここに！
へへーん♡
麗羅様!?

こ…これは
一体何のおつもり
です〃
だまれ
逆臣！
逆臣
ですと!?
姫様
ありました〃
ほうか
ああ
それは
殿の御遺詔
…
正宗に
国を譲る
やて
〃

おひかえください姫様!!
たとえ親子とはいえ殿の御遺詔を盗み見るなどもっての他!!恥を知りなされ!!
だまらんかい!こんなもん父上が書くわけあらへん!!
家臣の分際で遺詔を書き変えるなんて許されると思っとんのか!!
バカな!それは殿のお考えでございます!!
まだゆうんかこの逆臣!
姫……

と…殿…
お許しくだされ…
行くて
は!

お――い
姫さん
いるかー？
俺だ
雷様ーっ!!
お――っ
チビ助
久しぶりだな
姫さんは？
中で待ってるよ
将軍が今日帰ってくるの
教えてくれたの
お帰りなさい
雷

うひょ――
これ全部姫さんが？
雷々に
手伝ってもらって・
道師様のとこで
みっちり練習
したの
どう？
いや――
うめえよ
ほんと！
兵舎の飯とは
大違いだぜ！
あの…
雷？
うん
うん
あの――
うん
うん

ちょっと話聞いてェ!!
おわっと!
な、なんだよ姫さん
いきなりびっくりするじゃねえか
話ってなんだよ言ってみな
あの…
ごめんなさい、あたしが軽率だったばかりに迷惑かけて…
そりゃもういいって
牢でまずい飯食ったからこそ姫さんの飯が何よりもうまいって思えるんだぜ

まあなによ！
それじゃ普段ならおいしくないっていうわけ!?
ぷーっ!!
あまりといえばあまりだわ！もう下げます!!
わ――っ待ってくれ！悪かったよ
きゃはは おもしろい 雷様の方があやまってんの
プッ
何か入りづらいな
そーだね帰ろっか

だあ――っ!!
ていっ!!
やあっ!
雪
もう1時間になるわよ
一服したら?
お――っ
やっぱ一か月の間運動してねえと肉ついちまったな
クス
はいどーぞ
あ悪いな

か――っ
気持ちいいーっ！
あっ
そーだ
お風呂
わかしとかなきゃ
いいって
姫さん
そんな気
使わなくてよ！
だって
汗だくじゃ
寝る時
気持ち悪いでしょ
ふ――ん
何かこう
悪かねえな
こーいうのも
ヤつくな、こ
あ――
いかん
いかん
俺、明日から
近衛隊長
だぜ！
んなこと
考えてる
場合かよ！
た――っ!!
ていっ!!

なにいっ!!
呂斎が
呂斎が死んだ
だと!!
はっ
屋敷が
焼け落ち
ご遺体には
刃傷が
バ バカな
呂斎が
う…っ!!

と殿〃
殿!!
殿!!
医者だ!
早く!!
もうよい…
さわるでない…
天乱の時を得
兵を挙げること
三十余年…

天下を
ことごとく
たいらげ
銀河統一を
目の前に
しておきながら
自分の寿命すら
どうにも
できぬとは
なんたる
人生!!
わしの刀と
鎧を持っていっ!!
は?
ははっ!!

殿！
夜風は
体に毒で
ございます
床に
おもどり
ください！
だまっておれ!!
ふふ…
こうして
鎧を着けると
若かりし頃が
思い浮かぶ…
見よ
この星空を…
これが
わしの生きた
世界なのだ…

なんと
広いことよ…
この星空の
瞬みの果てに
何かあろうか…
わしは
そこへ行きつき
たかったぞ

比紀弾正死去
享年七十四才

あれま

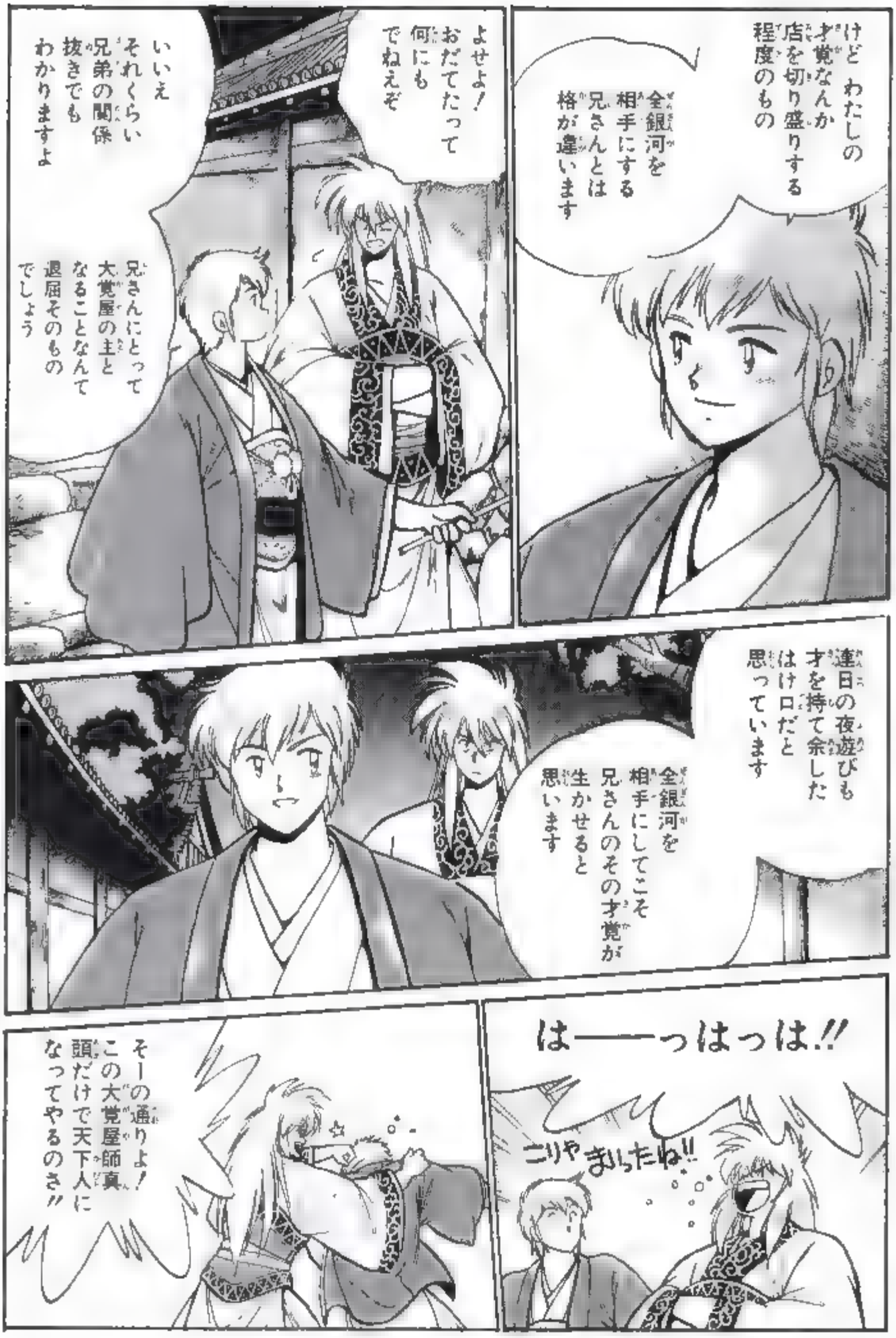
死んじまったよーだな
えっだれがですの？
弾正だよ比紀弾正！
えええっ!?
弾正様といえば近々帝の位にお就きになるって聞いてましたのに……
ま弾正も所詮天下人の器じゃなかったってことさ
器？
天の時，地の利，人の和
弾正はその三才のうち“時”を得られなかったんだよなこれが

とんなに
大国のお殿様に
なろうか
そいつが一つても
欠けりゃ
天下は取れねえのさ
学があるのね
きすかは
大覚屋さんの
若旦那
ははは
そーだろ
そーだろ
俺ってかしこい
だろ
この俺の
知謀の前に
弾正だろーが
正宗だろーが
天下の大将共が
みんな
ひきずいて
聞きやがるぜ
「天下は
とうすれば
取れるのか」
ってな
冗談しゃねえせ
俺の学はよ
他人に天下取りの
方法を教える
ために あるんじゃ
ねえ
俺自身が
この知謀を
引っさげて
天下人になるのさ
ああ
師真様

若旦那
お――女将 酒か？
その 英真様が 参っておられます お迎えだとか…
何 英真が？
ー
ー
よう英真 来てくれた のか
いや 助かったー
支払いは 済ませましたよ 兄さん

さあ帰りましょう
母上も心配なさってます
父上はいつも通りですが
わかったわかった
若旦那ー♡
ところでいくらだったんだ？
しめて百七十両ってとこですよ
やれやれおまえが来てくんなきゃここの下男にされるとこだったなー
二代にわたってただ働きですよ
お――また来るからな――っ！
兄さんかご用意してますよ
いいや歩いてくぜ
酔いもさましたいしな

じゃあお供しますちゃんと家まで付いてなさいって母上の言いつけですからね
バーカ俺は今一文なしだぜ
七日七晩女をとっかえひっかえ山海の珍味を並べての大宴会続きだ
たまには夜風に当たりたくもなるぜ
兄さん女もほどほどにしておかないと家追い出されますよ
かまやしねえよ俺はあんな店異味ねえよ
おまえっていう立派な跡継ぎもいるしよ
兄さん！
おまえを拓んでるわけじゃねーぜ
おまえには商才もあるし人を使うのもうまい
親父は正しい判断をしたのさ
ええそれは間違いありません！
よくわかってるしゃねーか


けど わたしの
才覚なんか
店を切り盛りする
程度のもの
全銀河を
相手にする
兄さんとは
格が違います
よせよ!
おだてたって
何にも
でねえぞ
いいえ
それくらい
兄弟の関係
抜きでも
わかりますよ
兄さんにとって
大覚屋の主と
なることなんて
退屈そのもの
でしょう
連日の夜遊びも
才を持て余した
はけ口だと
思っています
全銀河を
相手にしてこそ
兄さんのその才覚が
生かせると
思います
は――っはっは!!
こりゃまいったね!!
そーの通りよ!
この大覚屋師真
頭だけで天下人に
なってやるのさ!!

茶筅！
はい
俺はこの時代が
好きだぜ！
この乱れに乱れた
戦乱の時代がな！
他の天下取りの
連中にとって
俺と同じ時代に
生きたことが
運のつきだぜ！

ゴロゴロゴロ..
パタン

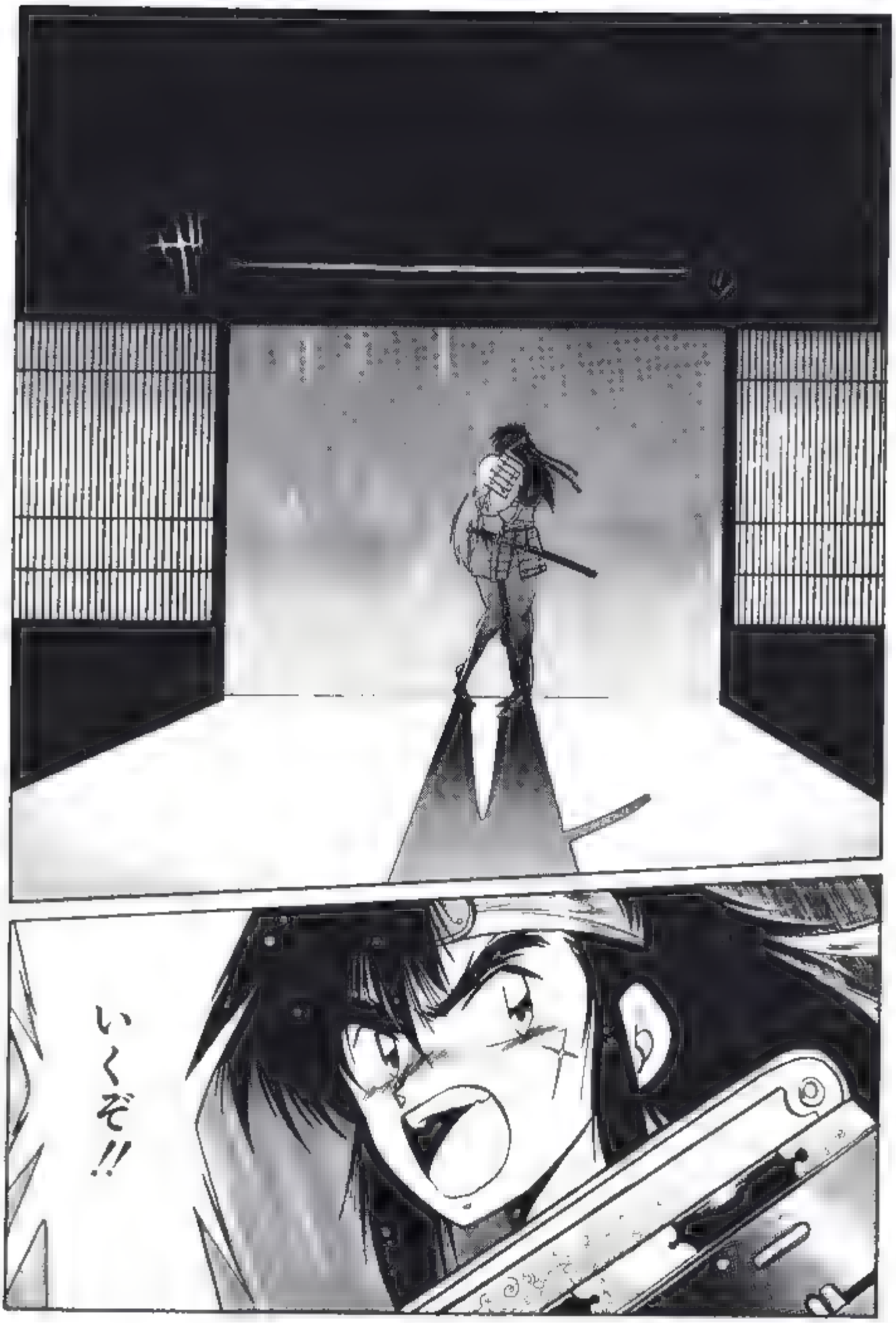
俺の気のせいならいいんだが
ゴロゴロゴロ…
一雨きそうだな

早くお城に行った方がいいと思うわ
え？
あたしもさっきから気になっていたの
鬼気というか何か起こりそうで
ポッ
ポッ
きゃっ!!

団長
どこです!!
団長!!
ここだ
どうした!?
朝早く
スンマセン!!
非常呼集です!
出陣か!?
よし
馬を用意
しといてくれ!
すぐ行く!!
へいっ!!
姫さん
どうやら
俺達の勘は
当たったようだぜ
ええ

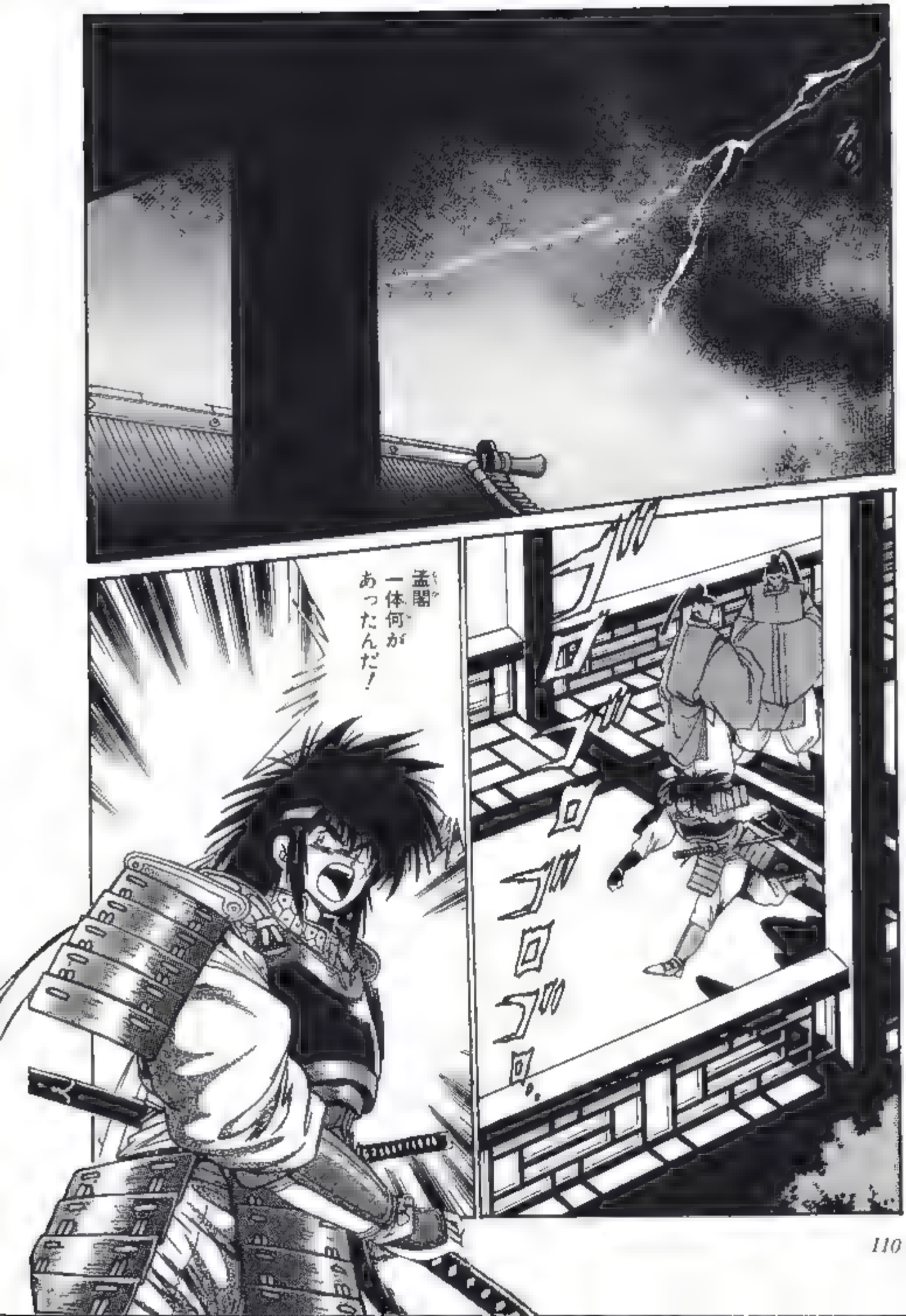
姫さん
はい
俺の生きるところは戦乱の真直中しかねえ…！
昨日みたいな楽しい時はもうないかもしれんそれでもかまわねえか!?
ええ！
あなたと一緒に歩めるなら！

落ち着いたら
狼刃将軍に
お許しをもらう
つもりだ
それで
いいな…
うん…

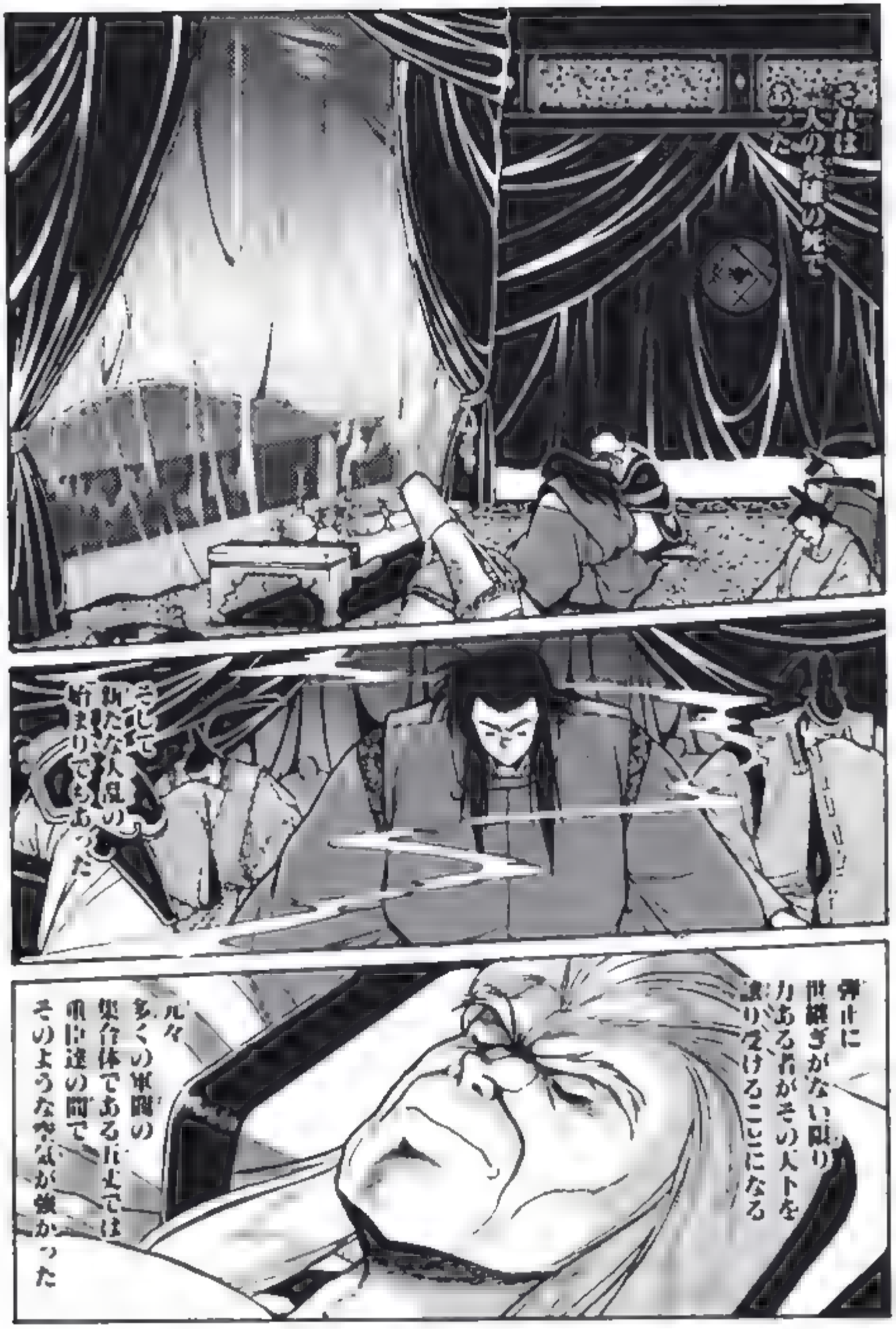

いくぞ!!

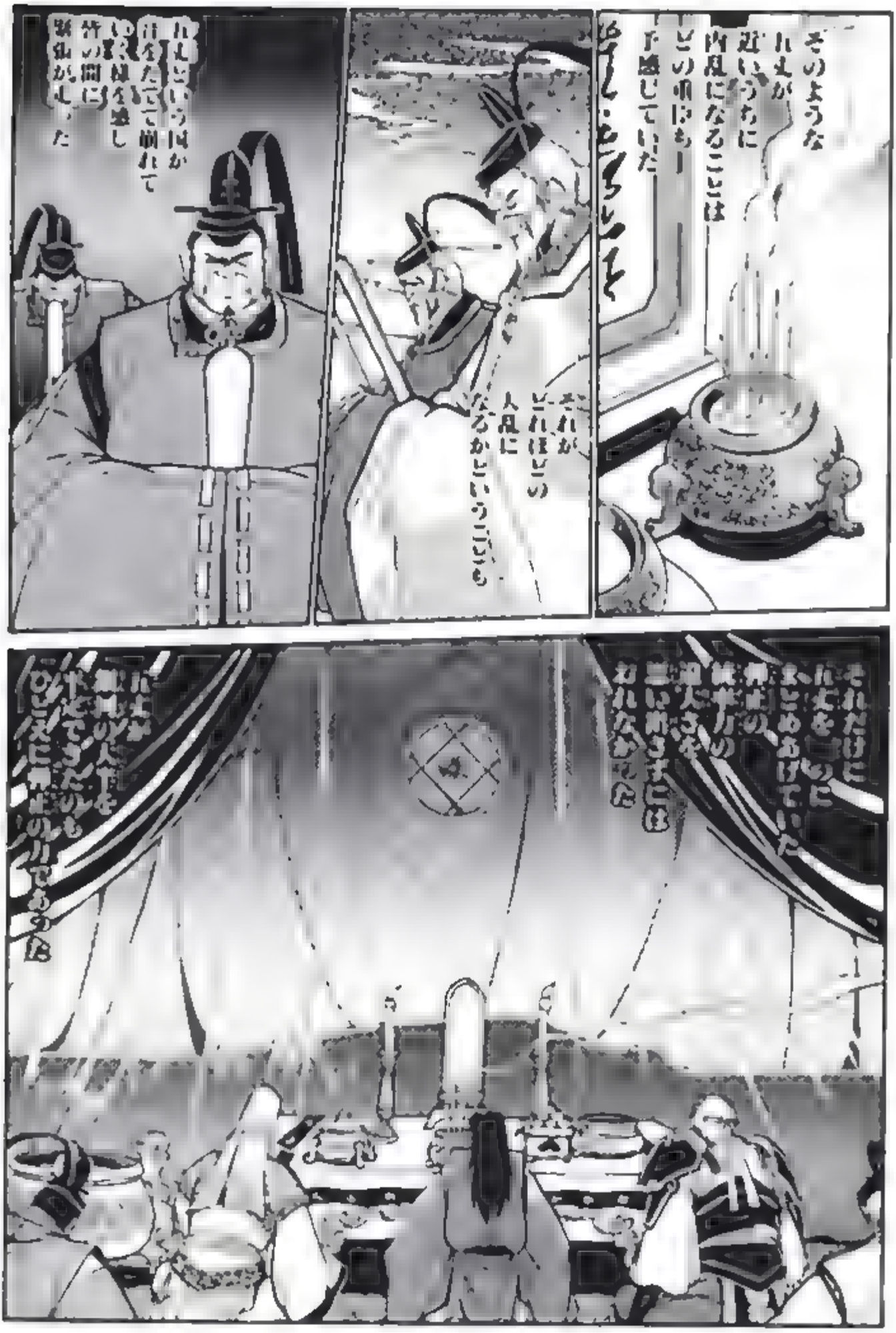
急げ!!
ついていく!
あたしは宙についていく…!!
例えそれが血で血を洗う戦乱の道でも…

それが
あなたの歩む道なら……
その道の先に
なにがあろうとも
どこまでも
ついていって
あなたの
行く末を
見届けるわ


ゴロゴロ
孟閣
一体何が
あったんだ!

集合したか！
参謀長！
はっ 第一近衛軍 竜我雷以下 全将校集合しました
全員 直立不動の姿勢で聞け!!
昨夜 殿が みまかられた！
!!


それは
一人の軍閥の死で
あった
そして
新たな人間の
始まりでもあった
弾止に
世継ぎがない限り
力ある者がその大下を
取り受けることになる
凡々
多くの軍閥の
集合体である五丈では
重臣達の間で
そのような争いが強かった


そのような
北丈が
近いうちに
内乱になることは
どの重臣も
予感していた
それが
どれほどの
大乱に
なるかということも
北丈という国が
江戸を大きく揺れて
いく様を感じ
皆の間に
緊張が走った
それだけに
北丈を一つに
まとめあげていた
幕府の
統率力の
偉大さを
思い知らずにはおれなかった
北丈が
激動の時代を
生き抜くためには
ひとつになり幕府の力であった

とにかく
今や
最大の
関心事は
南人の止まりであった
その実力は
五丈の個々の中では
判断できない
なにはともあれ
強大な五丈の国力を
いかに維持できるか
この一点に絞られた
四大事であった
親明・親倭は
退却・敗退は
自ら元師と称し
新たに元師府を
開設
その下に四人の
校尉をつけ
軍部を統括し
さらに
四人の文官を
太政大臣を筆頭とした
諸大臣に任命し
四元師は組織上
統制下に入ったが
実力者同士の
彼らの力では
四人とを押さえる
ことはできなかった

大元帥
凰鳴
驃騎元帥
玄偉
鳥元帥
伯牙
車騎元帥
鉄頡
今や
この九軍府の
四人が
九支の国政を
司ることになる
平陽四人の
協同統治は
非公式ではあるが
むかげでは
きしみながらも
かろうじて成功していた

そのころ
雷は近衛軍として
武士郎の
警備にあたっていた
亡き上官の
命により
よこしまな
行動を
起こすわが
出ぬよう
監視しているので
あった
左舷
全方位
異常なーし！
右舷も
同じく
異常なーし

なあ
孟闇
人間って奴は
果ないもんだな
どーしたんです
あんたらしくもない
いや
あれだけの力を
持っていた殿が
自分の
運命すら
変えられねえん
だもんな
俺に
自分の運命を
変えられる力が
あるかな
と思うとな
栄えるも威ぶも
兵家の常って
やつでさぁ
要は
自分の運命の
岐路って奴を
見定めて
その時に行動を
起こせるかって
ことでしょう
岐路を
見定める時か
…

団長！
左舷十五度
船影！
こちらに向かって
います
よし
停船
させろ！
鐘楼に
臨検するよう
伝えろ
搭乗者の
確認と
貨物を
見るように
となり
わかりました
よ――く
見張ってろよ！
とんな小船も
見逃すな！
殿の亡き後
つまんねえこと
してかす奴が
いるかも
しれねえしな
南天の
密偵なんかに
出入りされちゃ
たまんねえぜ
おう!!
だが
雷が雲間をひく前に
武士団を
出た船があった

ねえ 蝙蝠 これ見て
似合う？
あたし 一度でいいから こーいう礼服って 着てみたかった んだ
ちょっと はしゃいでる 場合じゃ ないだろ
あたし達には 密命が あるんだぞ
固いこと言いっこなし！ その密命の おかげで 南天への使者の 付きそいってことで こーいうの着れるん だから
ま そうだけどね

きゃ――っ!!
ちょっと
何だよ
今のは!?
船が
止まったよ!!
見ろ
船が近づいて
くるぞ!
五丈の
戦艦だ!!
停船信号
出してる!
ちょっと――
いきなり撃つ
なんて
ムチャクチャ
じゃない!

乗りこんでくるよ！
どこの旗印!?
骸
あれは骸羅軍だ
どーりでやることが乱暴だと思った

な 何事でございますかな
我々は急ぎの使者でございますぞ！
使者だと!?
お主ら南天に向かおうとしていたな
用向きをうかがおう！
そのようなこと話すことはできませぬ！
我々は君命を帯びて南天に向かっております！
どのようなおつもりで詮議なさるのか!?
君命だとぉ!?
それは亡き殿ではあるまい！
玄偉か鳳鳴の使いじゃねえのか!?
とんでもない！
亡き殿の御遺命でございます!!

その判断は兄者がする!!
かまわん船ごと兄者の許に連れていけ!!
逆らう者は斬れ!!
こりゃ大変なことになったぞ~~~
けどけどこれで麗羅様の計画通りってことじゃない?
四天王同士の相互不信はばっちりと「証明」となって現れていた

兄者！
おう 何かあったか？
はっ 遠征の船の中からとんでもないものが見つかりましたぞ
なんだそりゃ？

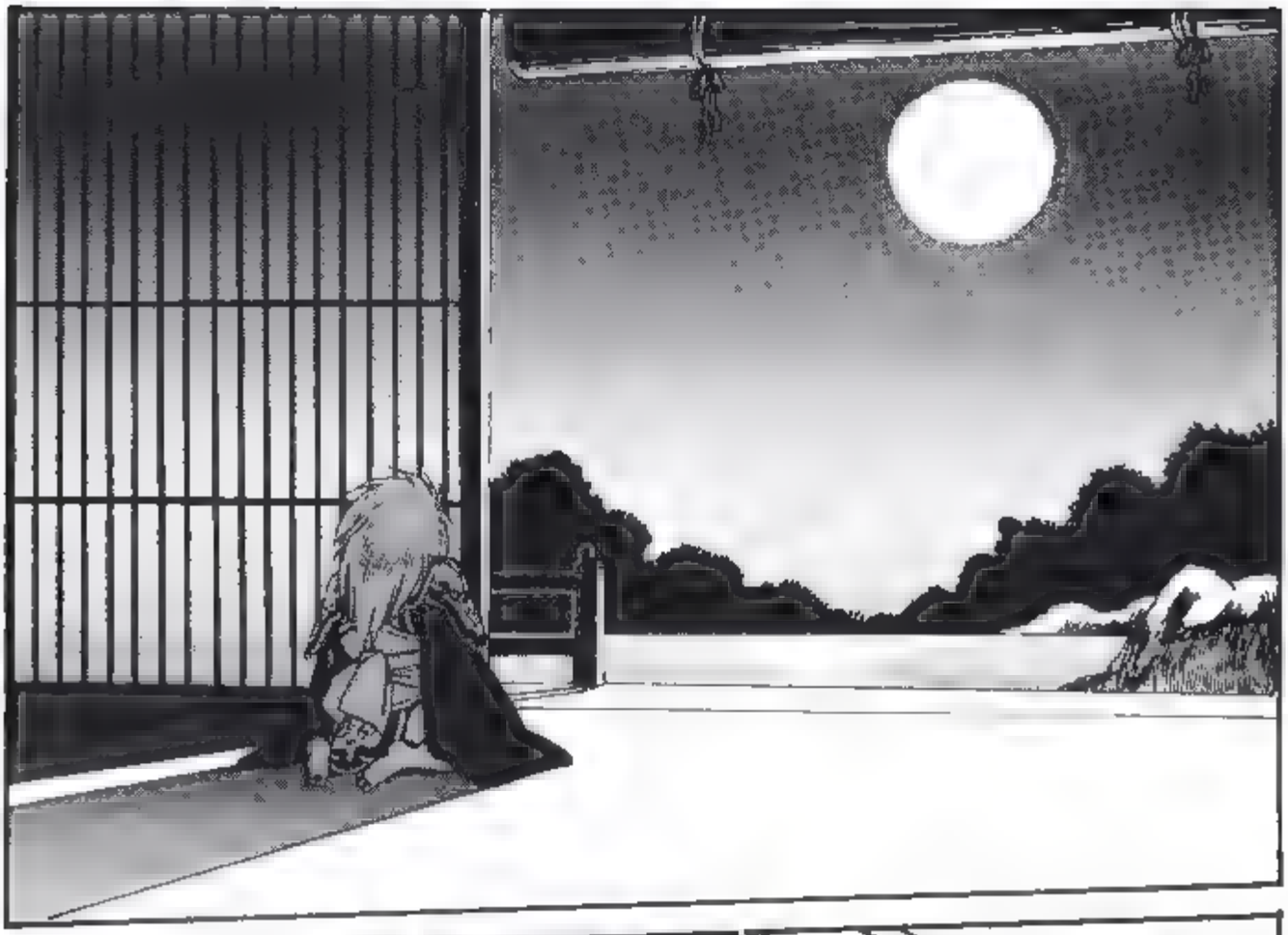
亡き殿の御遺詔でございます!!
御遺詔!?そんなものがあるなんぞ聞いたことがないぞ!!
これてございます
間違いねえ！こいつは殿の直筆だ
なぜこれを正宗に
よしその使者に会うぞ!!
はっ

たいふ
痛い目に
合わせたような
が、骸羅元師〃
おぬし これは
とーいうことだ!?
我々は殿の命に
より
だまれ!
だまれ〃
正宗に
国を譲ろうと
いうのが
殿の命だと
いうのか!?
ご御遺詔を
見たのか〃
臣下の分際で
何と恐れ多い
ことを〃
ああ
見て良かったと
思ってるぜ〃
殿や中央の
連中の考えそうな
ことだぜ〃
しゃあしゃあと
きれいごとばかり
並べてよ〃

かまわねえ
こいつら
皆殺しに
しろ！
船を破壊
するんだ!!
が
軍師…
やろ～～
ふざけやがって…!!
今の五丈が
あるのは
誰のおかげだと
思ってやがるんだ
!!

兄者！
なんだ!?
使者の中に二人ほど女子がいましてな
いてっ！
どうなされますか？
ほうなかなかじゃねえか
そいつらは俺が直々に調べる後はおまえ達が好きなようにしろ！
元師！わたし達は麗羅様の命により元師への使者として参りました！
なんだと？あのジャジャ馬の？
……
麗羅様は将軍のお力を頼みにしています
詳しくはこの書簡をごらん下さい

どのようなことでございますか兄者！
話が聞きたいその女達を連れてこいっ!!
ちょっといいかげん離しなさいよ!!
それと練国にいる骸延を呼び戻せ！
はっしかし骸延は練の羅候の抱き込み工作を
やかましい！こっちの方がでかいんだ!!すぐ呼び戻せ!!!
ふふふ俺にも運が向いてきたぜ…!!

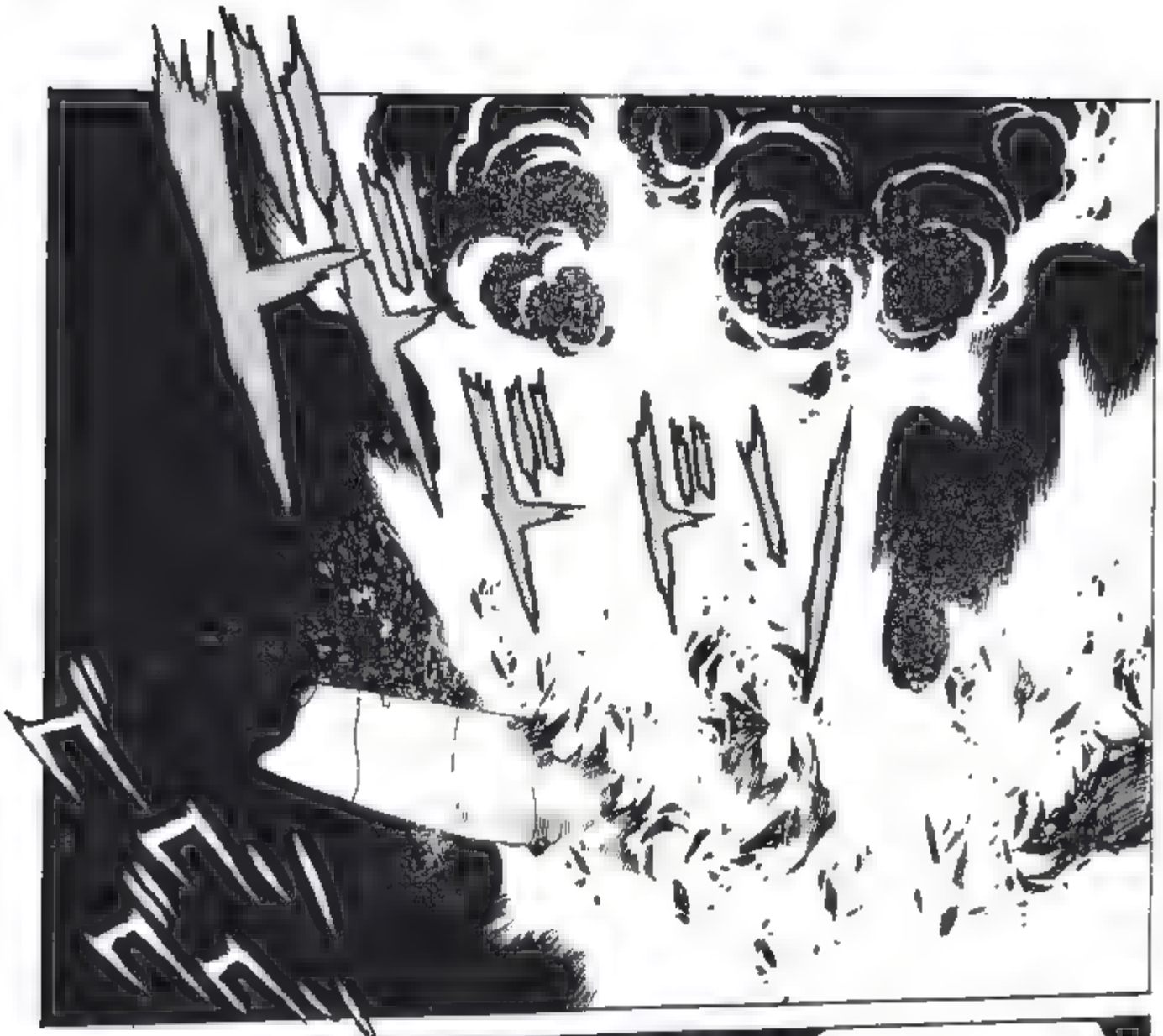


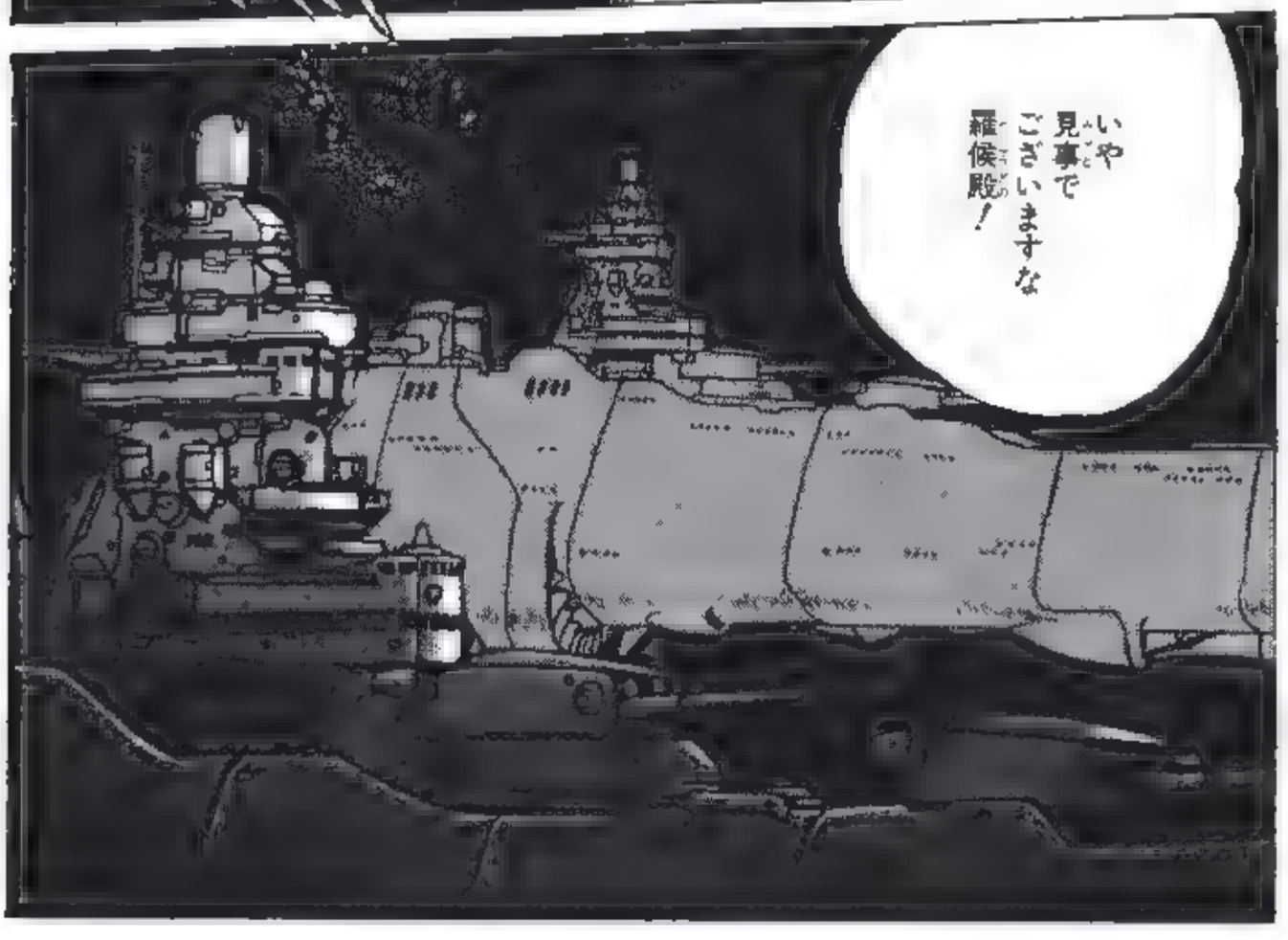
父上はなしてうちだけ置いて逝ってしもてん
うちは心細いやんか
けどな父上聞いたってや
うちはな一人だけ頼りになる男を知ってるんや！

その男は
父上の五丈を
ムチャクチャに
してしまうかも
しれんのや
けどうちは
その男に
天下人になって
ほしいんや
ええやろ？
うちは
そのためなら
なんでもするで
うちは
強い奴が
好きや
その男は
ほんま強いで
あいつが
天下人になって
うちを迎えて
くれるんが
夢やねん
わかってな…

竜我雷を
必ず天下人に
したるねん！

左舷90度
斉射3連
射撃用意――っ!!




いや
見事で
ございますな
羅候殿！

一糸乱れぬ艦隊の統率・練度・士気の高さ
どれを取っても我が五丈軍には練国軍に匹敵するものがあるかどうか心細くなります
へへ おぬし おだて方も心得ているな
しかし残念なのがあなた様のような勇者が正宗如きの手駒に使われようとは
!!

今何と言った！
練は兵は精鋭国土は富み栄えています
それなのに羅候殿は智の一将に甘んしておられる
亡き御父君がそのお姿を見られたらとう思われるか
斬延殿！慎みなされ〃
それ以上の高言！聞き捨てならぬ〃
斬りたければ斬りなされ！
だがおぬし達にこの俺が斬れるかな？
なにいっ〃
聞けばおぬし達正宗を恐れるばかりに主君に臣従をすすめたそうだな
この斬延いささか剣はたしなみますぞ
おぬし達のような腰抜けに斬られはせん〃
もういいやめろ〃

骸延殿
練には
練の考えが
ある
一将が他国の内政に
口出すのは
いかがなものかな
はっ
田舎武士ゆえ
作法を知らず
ご無礼お許し
くだされ
たが
時をわきまえる
ことが国家の大事
ですぞ
わ
わかって
いる！
よし
今日のところの
演習は終わりだ！
益州都に
もどるぞ〃
はっ！
取り舵一杯
半速前進〃

ふう…
益州都
羅候の奴
ここ一月の間
手を替え品を替え
挑発してみたが
なぜか動かぬ
正宗を恐れて
いる様子もない
性格的にも
この話に
乗ってくると
思ったが
兄上からの
命で 明日は
ここを立たねば
ならん
羅候がだめなら
練の国論を
反正宗に
しむけねば…
よし
あの男と
とことん話して
みよう！

と 殿
どどうか
心をお静め
くだされ
こ これ
酒を
もていっ！
うるさいっ〃
俺の怒りが
酒ぐらいで
消える
軽薄なもんと
思ってるのか〃
ははあ
たしかに殿の
お怒りは並の
ものでは
ございません
それは
よくよく
骸延の野郎
俺の足元
見やがって
よくもよくも
俺が
智の一将
だとお
〃

俺が正宗を
恐れてるとでも
思ってんのか!!
ドカッ
いや
よく我慢なされ
ましたな
将たる者
感情は常々
押さえるもの
若君も今や
立派な国主で
ございます
殿
お気持ちは
わかりますぞ
確かに今は
積極的に
動くべきです
座すれば
死を
待つのみ
ただ足かせに
なるのが
あの正宗の弟
虎丸君ですな
そうだ
正宗は
名と実とっちを
取るか俺を
ためしてやかる
"
充興

あいつを人質に取るのは簡単だ！

だが人はどう言うか！

〝練の羅候は弟を預けるまで信用していた同盟国を裏切り幼子を人質に取る冷徹な男〟

へっ銀河中で笑い者だぜ

確かに人の道としてはとてもほめられたものではございません

だが今は戦国の世

国のため君主が泥をかぶる覚悟が必要でございます

わかってる！

わかってるからこそ悩んでるんだ!!

ちくしょう正宗の奴とんでもねえもん押しつけやがって!!

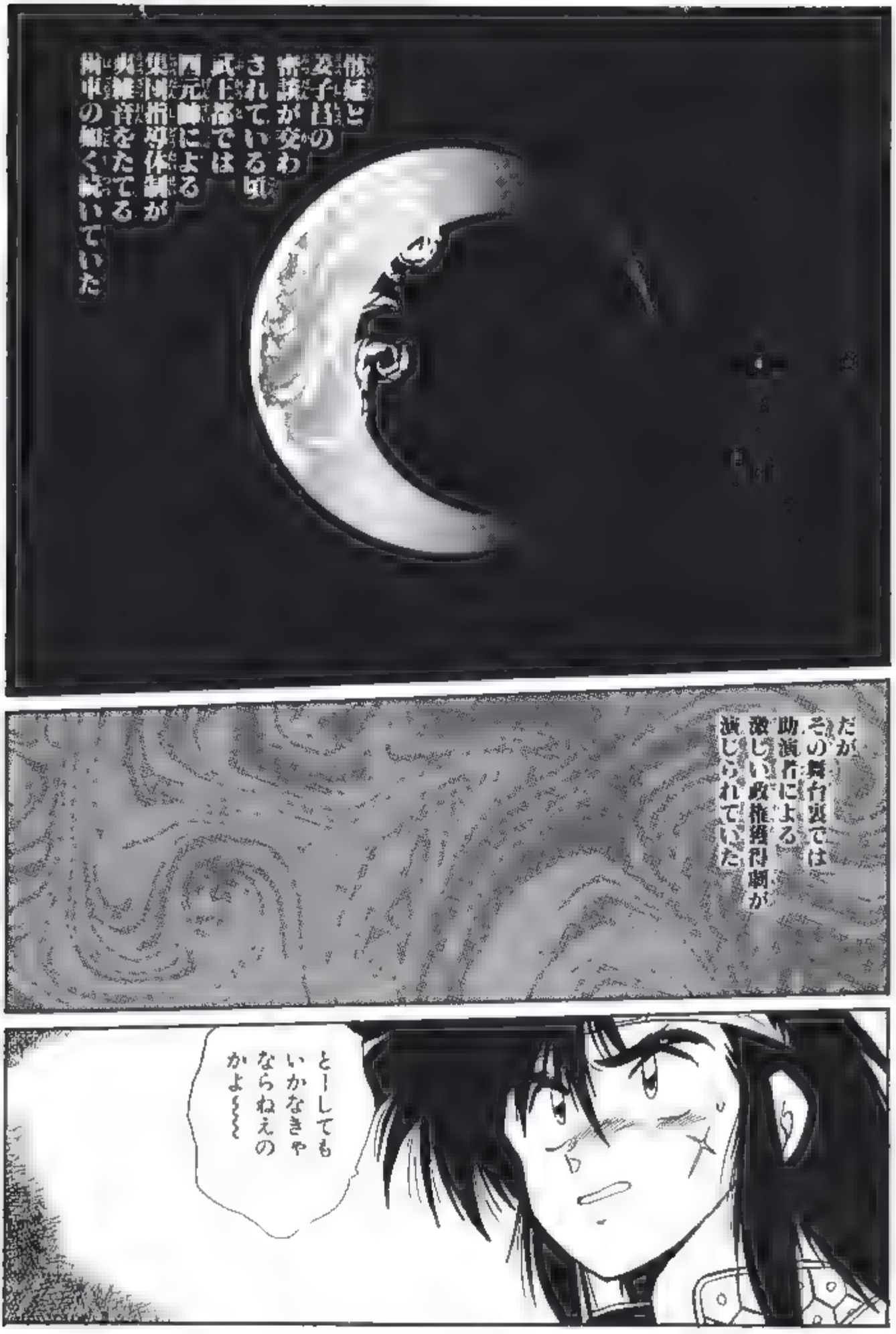
こーいう時あいつならどーするだろうな

あいつなら
!!
あー
何考えてんだ
俺は〃
ガヴッ
〃奴はただの
雑兵!
俺は練の
国主だぞ〃
〃考えてると
イライラする
よし
今から
打ち稽古だ
道場に腕の
立つ者
二十人ほど
集めろ〃
ははっ
どーか
お手柔らかに

あの広い大銀河にも確実に時は流れている
歴史の中では…ほんのまばたきする間かもしれぬが…
だが我々はそのまばたきの間に全てを成しとげねばならない…
同感ですな
斡延殿おぬしはそれを我が殿に説きにきたのであろう
いかにもわたしは一月の間〝時の利〟を羅候殿に説いた
それに五丈と智に代わる〝新世界図〟もな
だが殿は腰をあげようとはせぬ・だからこのわたしのところにきた

さよう
姜子昌殿は
国軍総司令官であり
当代きっての名将！
あなたは
どうお考えなのか
わたしの考え
などない！
ほう
天下の参謀に
あらぬ言葉！
何の考えもなしで
どうやって
国を動かす気かな？
殿のお考えに
なることが
わたしの考えだ
殿と異なる考えは
持たぬ！
わたしの
できることは
殿の考えに従い
犬馬の労をも
いとわぬことだ
そして
それは骸羅軍の
智恵袋である
骸延殿も
同じであろう
犬馬の労
お互い泥かぶり役
ということですな
それが
自分の
役目だ
殿に武人としての
名を汚させるような
ことはさせぬ
泥でもなんでも
かぶれるものは
全てこのわたしが
かぶる

それでは
羅候殿の
最大の足かせである
正宗の弟
虎丸の件
おまかせして
よろしいか？
承知した！
我々も
羅候殿も
お互い南蛮の血を
ひく者．
これからも
ご昵懇に
願いたいですな
あなた方も
我々の後ろ盾で
自由に動ける
はず
期待してますぞ
あ――
こいつらじゃ
相手にならん!!
姜子昌を
呼べっ!!
姜子昌を!!


幽霊と妖子(あやこ)様の噂話が交わされている頃
武士郎では
四元輔による
集団指導体制が
大維音をたてる
前年の如く続いていた
だが
その舞台裏では
助演者による
激しい政権奪取劇が
演じられていた
とーしてもいかなきゃならねえのかよ～～～

俺あの姫さん
苦手なんだよな～
しかし
姫君の身辺を
警護するのが
我々の役目ですぜ
赴任のあいさつ
ぐらいは
しとかなきゃ
知らない仲。
でも
あるまいし
まあ確かに
亡き殿にたのまれ
ちまったからなー
娘をたのむってな
まあ あの姫様も
さびしい思いを
してるだろうし
優しい言葉の
一つや二つ
かけてやんなさいよ
うんうん
優しい
言葉ね！
ニコッ

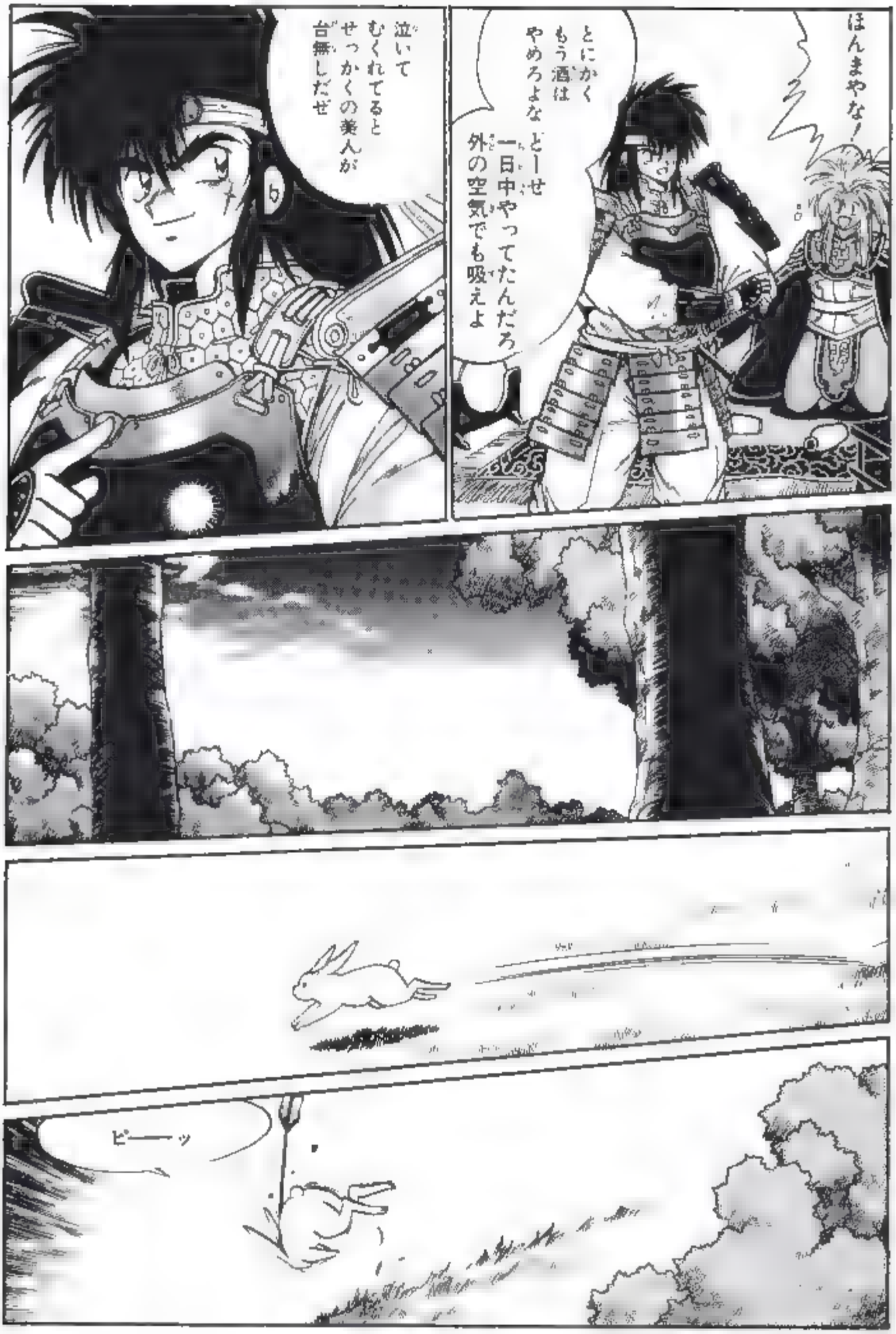
だれだ 今の女？
知らねえんですか 玄偉元帥の 腹心中の腹心 華玉様ですぜ
あ――
あれがチビ助の 姉さんって奴か
けど えれえ 美人だな――
おー 美人といえば 団長ついに 紫紋姫を嫁に迎える 決心がついた そうですな
だ だれから 聞いた そんなこと!!
いや ちょっと小耳に はさんだだけ ですけどねー
わかった! あのチビ助だな―― 姫さんも 姫さんだ! だまってりゃ いいもんを!!
五丈一の暴れん坊も とうとう 年貢の収め時 ですな
うるせー っ!!

あの男…！
も 申しわけありません 姫様〃
じゃかあしい！ さっさと 酒持って こんかーい
うわっ
はっ ただちに
ドカ!!

ったく
どいつもこいつも
うちに逆らい
おって〜〜〜
ただや
おかんさかい
覚悟しいや〃
姫さん！
何だよ
こりゃ〃
な——んや
雷やないけー
よ——きたな——
まあ座ってやー
ったく
真昼間から
こんなに飲んで
体壊すぞ
バカヤロウ！
うっさい！
ほっといてんか〃
おまえなんかの
知ったことや
あらへんわい！
そうは
いくかよ！
一体こりゃ
何のやけ酒だ!?

ふん！
そんなもん
聞いて
どーすんねん
やなことが
あったなら
俺に話して
みろよ
大した力にゃ
ならねえけど
酒よりましだぜ
ははは…
アホ
雷に何が
できるっ
ちゅうんや
わあああん!!
お
おい
雷は
優しんやなぁ
うちは
うれしいで
こら
泣いてちゃ
わかんねえぞ
一体
どーしたん
だよ

なんでやねん
みんな父上の
恩を忘れた
ゆうんかい！
そーじゃなくて〃
そりゃ多分
殿が亡くなったのを
隠したいって
ことじゃねーのかな
全軍の士気にも
かかわるし
敵だって
そーやな
雷には
無理な
相談やったな
えーねん
えーねん
どーせ
そら
あんまりや！
父上は
いつまでも
成仏でけへんで
きまよっとるわ
う――ん
けど俺に
言われても
こいつだけは
わかった
とにかく
狼刃元帥に
俺から
よ――く
言っとくから
じゃあ
なにか！
亡き殿の葬儀
やりたいけど
重臣が皆反対
したってのか!?
うん…


ほんまやな！
とにかく
もう酒は
やめろよな
と一せ
一日中やってたんだろ
外の空気でも吸えよ
泣いて
むくれてると
せっかくの美人が
台無しだぜ
ピーッ

あったり――っ!!
へえ――
うまいもんだ
まかしときいな
これでも弓には
自信あるねんで!
やれやれ
現金なもんだぜ
すっかり
機嫌
直してやがる
雷?!
鹿やで!!
おうっ
まかしとけって
!!

その鹿を仕留める
狩人は・・・
それを追う
狩人は銀河を
駆け巡る・・・
せやけど
その鹿は
父上の死によって
また銀河という
野原に放たれ
あの鹿は
父上が手にしていた
天下そのものや

雷や!!

ふ――
やっぱ体動かすんはええな
ちょい一休みしよーや
酒よりずっといいたろ
ほんまや気分が晴れたて
また ちょくちょく行こ――な
あ
おおいどーしたんだ
あかんなんや動き回って酔いが回ったわ～
しょうがねえなったく
クス
!!

てっ てめえ
だましたな
――っ!!
きゃははは
やった
やったー♡
いいやんか
キスくらい
紫紋となんか毎日
やっとるんやさかい
うちかて一回
くらいはな――
してねーよ!!
え――っ?
雷もしかして
あっちの気が
あるんやないか?
知るか!
帰るぞ!!
あ――
待ってえな
!
気いつけや
男ばっかの
軍隊やさかい
知らず知らずに
ホモに
なっとったって
ことあるで
うるさい!
俺は
正常だ!!

何？
竜我を殺せだと？
これは穏やかじゃないなあの男がおまえに何かしたのか？
そんなんじゃありません!!
あの男から恐ろしいほどの運気を感じました
王道を歩まれる玄偉様にとって恐れることはありませんが出る杭は打つにこしたことはありません
我々の手の内にある間に処分するべきです！
いや…
おまえの道士としての眼を疑うわけではないが殺してはならん
どこか最前線、そうだな南京楼あたりに赴任させよう

そんな!?
それでは虎を野に放つのと同じです!
災いは未然に防ぐべきです!
華玉!!
確かにあの男の悪運の強さにはわたしも驚いている!
だが処刑するにはまだまだあの武勇が惜しい.
それにあの男は狼刃にかわいがられている
今狼刃と事を起こすわけにはいくまい
しかし.
案ずるな南京楼は遠いしかも最前線だ
南天軍の重圧をもろに受け中央には奴の目は向かん
野戦向きの男だからな
大臣共に圧力をかけ転属させよう
城持ちになれるのだ狼刃も文句は言うまいて
よいな華玉 決して事を荒だてるな
はいおおせのままに

大事の前の小事
おまえの申す〝時〟が近づきつつあるのだ
今は〝待ち〟の態勢を崩すべきではない！必ず動く奴がでる
はい
えっ……
俺を南京楼の大守に…!?

これがその証書に印綬である
ただちに出立するがよい！
ちょ
ちょっと
待ってくれよ!!
俺は殿から直接近衛軍に任命されたんだぜ！
あんた達に何やらいわれる筋合いはねーぜ!!
だまらっしゃい！
確かに殿の御遺命は尊重すべきではあるが官位の任命権は今や我々最高評議会にある
一体何が不満か！官位も上がり今や十万の兵を持つ城持ち武官であるぞ
貴殿の武勇は南天にも聞こえておろう
それ故に最前線の星をまかすのだ
事態は刻々と変化しつつあるいつまでも御遺命に縛られるわけにはいかん
適材適所じゃよ

く…っ!!
俺に命令できるのは狼刃元帥しかいねえ!!
もちろんこの昇進は狼刃元帥を始め元帥府の承認済みである
な…っ

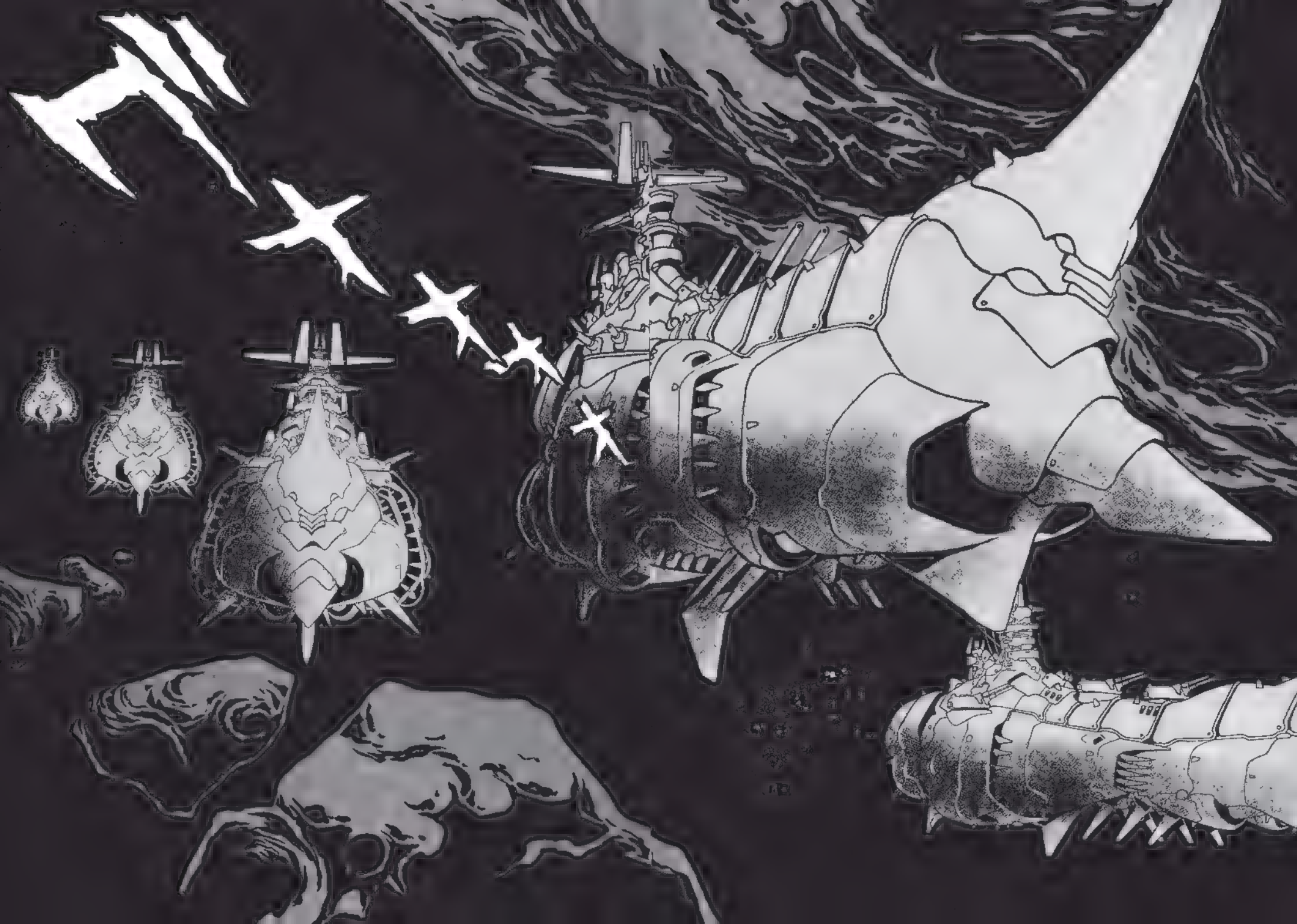
元帥!!
きたか 雷
皆 少々席を はずしてくれるか
はっ
う〜〜っ
やれやれ ひどい顔だな まあ座れよ
ひっでえぜ!! 俺は殿から 近衛軍を まかされたんだぜ それを・舌の根も かわかねえうちに
よく聞け 雷!
今の 中央は風向きが 悪い

皆があわよくば亡き殿の残したこの五丈という力を引き継ぎたいと思ってる
間者！きったねえ手使いやがる!!
バカ！あたしだって同じことやってるよ
やがてこんなものじゃすまなくなるこんな権力争いの手先に使われて死ぬことはない
天下とはもっと上にあるんだぞこんなところで命を落とすより外でよく見極めろ必ずわかるはずだ自分が立つ時がな

おもしろくなるな
そう
竜が大海に放たれるのさ
大海にな…

梨扇！
ここに
そちは
すぐに南京楼に
まいりなさい！
そして赴任してくる
竜我雷に
近づくのです
片時も
離れぬよう
竜我雷・
そう
そしてその男の
全てを
このわたしに
報告するのです
わかりました
昼夜問わずに
監視いたします

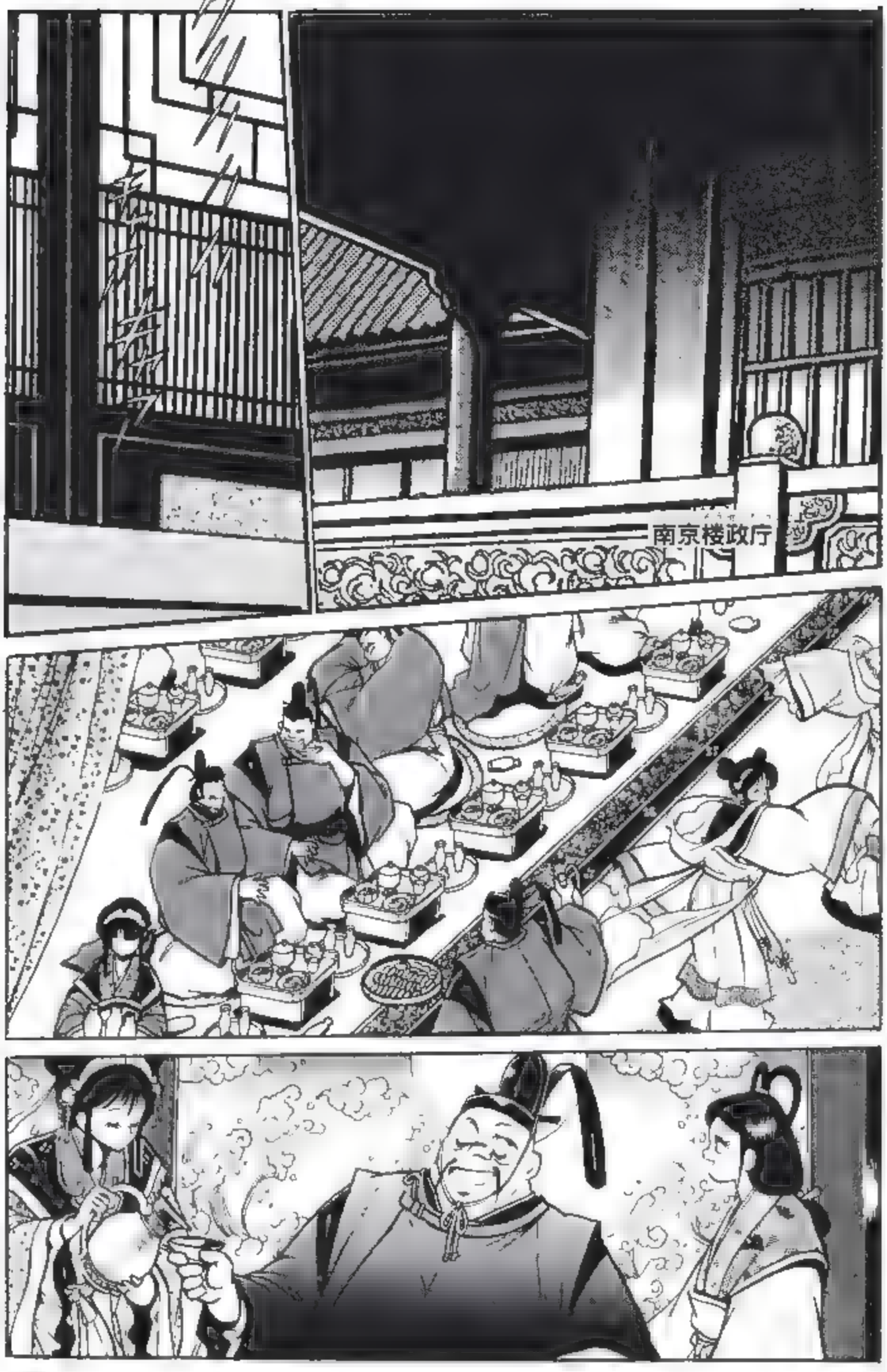
やがてわたしの
別命が届いた
ならば
竜我雷を
消しなさい…!!
無線は
どうだ
まだ通じないか
?
空間の状態が
悪いわけ
じゃないし
これは
妨害が
入ってるぜ
探信儀に
反応が出た
4軸以上の
大型艦が
多数接近!
何!!
位置は!?
左前方
肉眼でも
見えるぞ!!



南京楼

ふあーーっ!!
退屈そうね若旦那
毎晩女攻めだからな飽きちまったよ
じゃあ今晩あたり趣向を変えてみんなでパーッとやりましょうか
ハハハ体がもたねえや
最近町でなんかおもしろいことねーか?
そーいえば近々この南京楼の太守が代わるとか

へえー
今の大守は
親父たちが
賄賂漬けに
してたから
今度は堅物
かもしれんな
なんて奴だ？
ポ
ポ
さあ
ただ
二十そこそこの
若武者だと
聞きました
ほら この間の
南征で手柄を
立てた
おいおい
そんな若僧に
太守が務まるのかよ
弾正が死んでから
五丈も混乱してっからな
人を見る目がない奴
ばっかりなんだな
あれ
亡国の民よって
とこかあ
あ――
退屈！


南京楼政庁

朱金将様
一大事ですぞ〃
なんじゃ
騒々しい
この天下太平の中
何が一大事じゃ
これを一大事と
言わずして
いかがしますか！
新太守がただ今
到着しました〃
なにいっ
!?
こちらへ
向かって
おります〃
太守様
これはもしや
我々と豪商たち
との関係を
中央に知られ
たのでは
コソコソ
ばかな〃
第一 太守の
印綬も証紋も
このわしが
持っている
のだぞ！
そやつらは
偽者だ〃
引っ捕らえい〃

だれを
引っ捕らえる
だって？
うっ!!
昼間っから
女とたわむれるとは
役人とは
いい身分だな
ぶ…無礼者！
このわしを
朱金将と知っての
狼藉か!!
名を
名乗れ!!
俺は
竜我雷!!

竜我雷
話には
聞いていたが
こいつか
〃
単騎で
正宗に挑んだ
命知らず
上の人間も
一目置いて
いるとのことだ
今日より
南京楼は
この竜我雷の
もとに入る！
ま
よろしくな！

おいっ
何をしている
新太守様の
御着任だぞ！
ひれ伏して
あいさつ
せんか!!
は
はははあ
新太守様
御着任
おめでとう
ございます!!
ええい
やめい
やめいっ!!
わしが
ここの太守じゃ！
勝手に太守を
名乗るなぞ
断じて
許さんぞ!!
ひかえろ
太政大臣により
正式に任命
されたのだ
印綬も
ある
確かめ
られい!!
ばかな！
見よ これが
本物の印綬じゃ
紛物なぞ
持ち歩きおって!!

わしは亡き殿より直接ここの統治をまかされ印綬を渡されておるのだ！太政大臣のとは格が違うわ〃
もう時代は変わった今や五丈は太政大臣を筆頭に集団指導体制で治められている！
人事も刷新されて当然！ただちにお引き取り願おう〃
く――っ言わせておけば田舎侍の分際で〃
構わん衛兵！こいつらを引っ捕らえろ〃
外に放り出せ〃
はは
なんだとおっ〃
ひっ〃
な何をしておるこいつらは賊軍じゃぞ〃

まあ
まあ
待たれよ
こんな
天気の良い日に
歯をむいて
いがみ合う
ことも
ないでしょう
が
ハッハッハ
庭を見なされ
若葉が
まぶしいですぞ
どうですかな
酒宴の席を
外に移されては
だれだ
おまえは？
三楽斎!!
おお孟闇か
久しぶりたな
ここで会える
とは
思わなかった
ぞ！

この闇の南征の時はがんばったそうじゃないかいやさすがだな！
なんだ孟闇知り合いか？
えええまあ
するとこちらの若武者が五丈にその名も轟く竜我留殿ですな
いや――お会いしたかった！名前の通り天にも駆け登る竜の如きその精悍さ!!
あなたのような勇者様がおられる限り五丈は盤石！正宗恐るに足らずですな!!
ははは…
あっこれは失礼身共は三楽斎馬防南京楼駐屯軍司令を務めております
先程よりの話を聞きますところとうやら何か手違いがあった様子
どうでしょうかここは中央に一度お伺いして善処しようではありませんか

ふん
仲々
おもしろい
奴だな
いいぜ
そうしよう
それでは
取り合えず
充分な
おもてなしをと
客間に…
わかった
みんな
行くぜ!
おう!
バ バカモノ〃
三条斎
きさまわしの
部下だろうが〃
軍司令官として
奴らをつまみ出す
のが
仕事だぞ〃
太守
冷静に!
連中には
十万の兵が
いることを
お忘れなく!
守備兵が
束になっても
かないませんよ
う…

とにかく
事を荒立て
ないように
しないと
万事この
三楽斎に
おまかせを
むむむ
なんか
妙なことに
なっち
まったな
ったくだぜ
せっかくの昇進に
ケチが
ついちまったぜ
まったく
役所仕事ってのは
これだから
いけねえ
そうじゃ
ねえ!

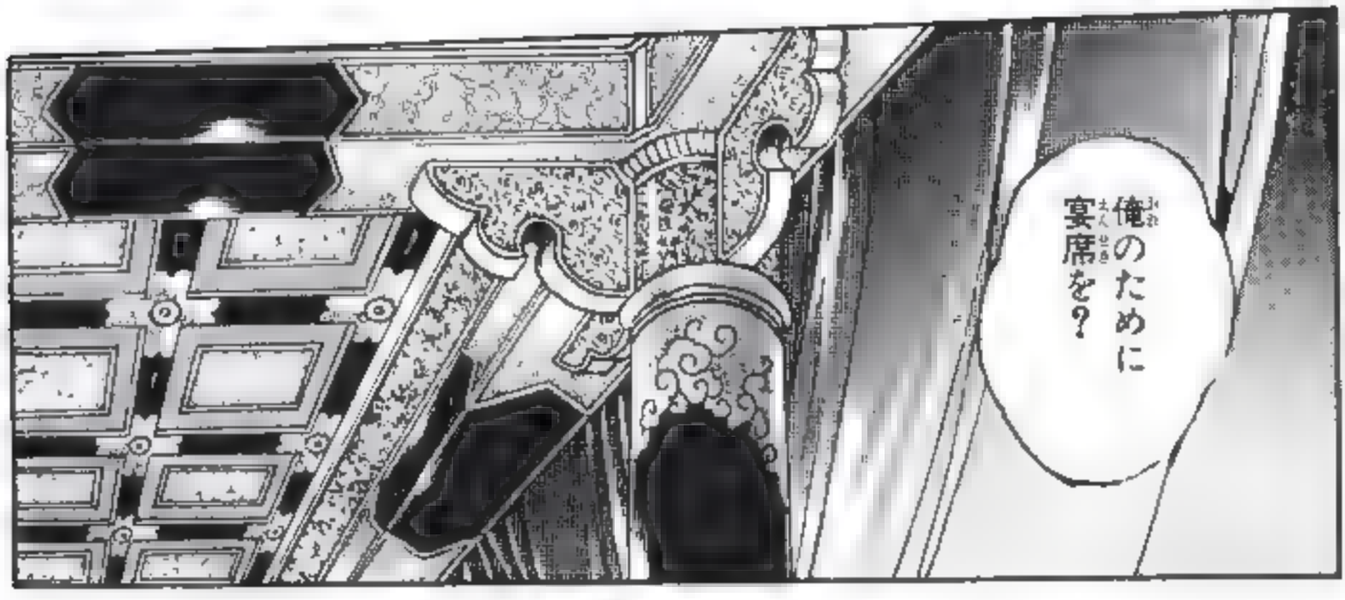
こいつは
明らかに
陰謀だ！
孟閣！
雷と朱金将が
対立するよう
わざと二人の大守を
立てたんだ
雷の力を
そぐために
なるほど
くそうっ！
一体だれが!!
中央のだれか
いや全員かも
しれん どっちにしろ
雷を恐れてる
奴らの遠謀だ！
確かに
皇族の娘を娶り
亡き殿のうけも
よかった
武名も高い
そんな男が十万の
兵を持ってりゃ
だれだって
恐れるからな
ここはまさに
内憂外患！
内に朱金将一派
外に南天軍の重圧
その見えない檻に
雷という
猛虎を閉じこめ
ようとしているのだ
その力をそぎながら
正宗への防壁として
使おうたぁ
腹黒い連中の
考えそうな
ことだぜ！

竜我殿！
！
竜我殿
ここに
いらっしゃい
ましたか
捜しましたぞ
なんか
用か？
いや
せっかく太守に
任じられながらの
この騒ぎ
さぞかし気分を
害されてる
だろうと
思いまして
・・・・
ほれ！
え？
こ
これは
俺のもらった
印綬だ
朱金将に
くれてやれよ

お待ち下され
まだ中央に
お伺いをも
しておりませんぞ
いいんだ
どーせ
返事は来ないぜ
連中は俺が
ここでドンパチでも
始めると思って
るんだろーが
あいにく
太守なんてもん
俺は興味ねえんだよ！
……
俺には十万の兵と
南京楼という
拠点があれば
充分だ
おまえのボスが
今の生活を
楽しみたいんなら
太守に祭り上げて
やるさ！
ただし
ただし？
俺の軍団は
朱金将の
指揮下には
入らねえ！
口出すと
命がねえぞ!!

そうか
そうか
あの若僧
わしが太守だと
認めたか
いや
よく説得
したな
でかしたぞ
しかし
太守
まだ安心は
なりませぬぞ
ん？
なぜじゃ
奴は
十万の軍の
兵権を握って
おるのですぞ
その気になれば
実力で南京楼を
奪うことも
できます
た　たしかに
あのような
血の気の多い
人間に
強大な兵権を
与えるのは
まずい
な　なにか
よい手は
ないか？
さりとて
殺すにしても
残った十万の兵が
敵に回ります
やはり
ここは
懐柔
するのが
一番でしょう

宴を開き
先程までの
ことを水に流し
太守の器量の
大きさを見せる
のです
あの男は
まだ若いし
きっと感服
するでしょう
なに？
そんなことで
よいのか
できれば
その席に
町の豪商
名士も呼ぶのです
太守の名も
上がりますぞ
そうか
そうか
太守なれば
こその
器の大きさを
見せてやろう
よし！
明晩
宴を開く！
三楽斎
おまえが
取りしきれ！
はっ!!


俺のために
宴席を？

諸将を始め
有力な市民も
多数集まります
ぜひとの
太守の仰せです
へー
どんな趣向かな
だれが
取りしきっている？
三楽斎様で
ございます
あ――
あの男か
わかった
楽しませて
もらうぞ！
はは っ
ては
お待ちして
おります
団長
ちょっと
クサイですぜ
用心した方が
あの太守には
そんな
度胸はねえよ
あったにしても
かまわねえじゃ
ねえか
太守を殺す
理由ができるぜ
おいおい
おっかねえ
こと言うな
孟闇

そうして
ほしいって
思ってる奴が
この城内には
いるってことだな
恐らく
太守が死ねば
得する奴がか？
きったねえな！
とこの
といつだ!?
まあ
いいじゃないか
せっかく
舞台まで
用意して
くれてんだ
しばらく
そいつらの
演出で演技
してやろうぜ！

次の日の夜
南京樓政庁内で
【宙の着任祝い】が
開かれた
高級官吏 諸将
そして町の有力者
豪商達が
続々と集まり
盛大な宴となった

いやいや
竜我殿には
先日のこと
快く
お許し願えて
安心しましたぞ
いや
太守こそ
この俺のために
こんな宴席を
用意してくれるとは
ありがたいぜ
見なされ
有力者は
全てそろって
おりますぞ
皆竜我殿の
武勇を
頼みにして
います
これで南京楼は
安心だと
あの二人
ですよ
もちろん
豚は
朱金将ですが
英真！
竜だろうが
なんだろうが
我々の手に負えん
相手では
意味はないぞ
豚でも
わしらの
思うように
動いてこそ
価値があろうが
なるほど
そうですね
まさに
豚と白竜ですね
何がだ？
英真

確かに
太守なんかの
器じゃない
ぼく達の手に
負えない怪物かも…
その時
英真のみ
この宴席の
殺気を感じていた
ん？
見え見えの
刺客か…
舞台俳優は
そろった
な！

どうなされた
竜我殿？
太守！
俺を
殺してでも
太守の座は
守りたいか？
は？
な なんの
ことて
バカが!!
ひっ!!
太守!!

よく聞け！
朱金将は
この俺を
暗殺しようとした
だから
討った！
文句ねえな〃
な　なんと
いうことを〃
太守が
そのようなことを
するわけがない!!
この反逆者め!!
それだけじゃねえ
酒色におぼれ
南天に通じていた！
そうだろう！
三楽斎〃
はっ!!

三楽斎
き きさま
主君を
裏切る気か!!
各々方も
覚悟
なされい!!
竜我様
これが
朱金将の
百にのぼる
罪の訴状で
ございます
御見分を!
おうっ
それには
太守以外の
役人の不正や
賄賂を贈った
商人の名を
書き示して
おきました
どうか
お裁きを!
……

ガヤガヤ
まあいいだろう
太守がこんな調子だからな下の連中が真似してもしょうがねえや！
よって他の連中は見逃してやる！

おまえ達の
罪は
朱金将が
今背負った
ことにする！
だが
今後は
許さねえぞ!!
はは一っ!!
いやあ
お見事な
お裁きでしたぞ

竜我様は
お若いのに
芝居がお上手
ですな
感服いたしま
したぞ！
芝居？
これを見ろよ
ああっ!!
白紙だ！
不正役人の名も
何もないぞ!!
いやあ
当然でしょう
そんな賄賂が
どうとか
この町じゃ
多すぎて
書きとめられま
せんよ
しかしまあ
度が過ぎて
ましたんで
ちょっと
お灸を
すえて
やりました
いや
ほんと竜我様の
迫力満点の
お裁きで少しは
ウミが出せた
でしょうな!!
おまえの
狙いは
なんだ？
三楽斎
は？
ただで
あんな芝居の
演出したんじゃ
ねーだろ！

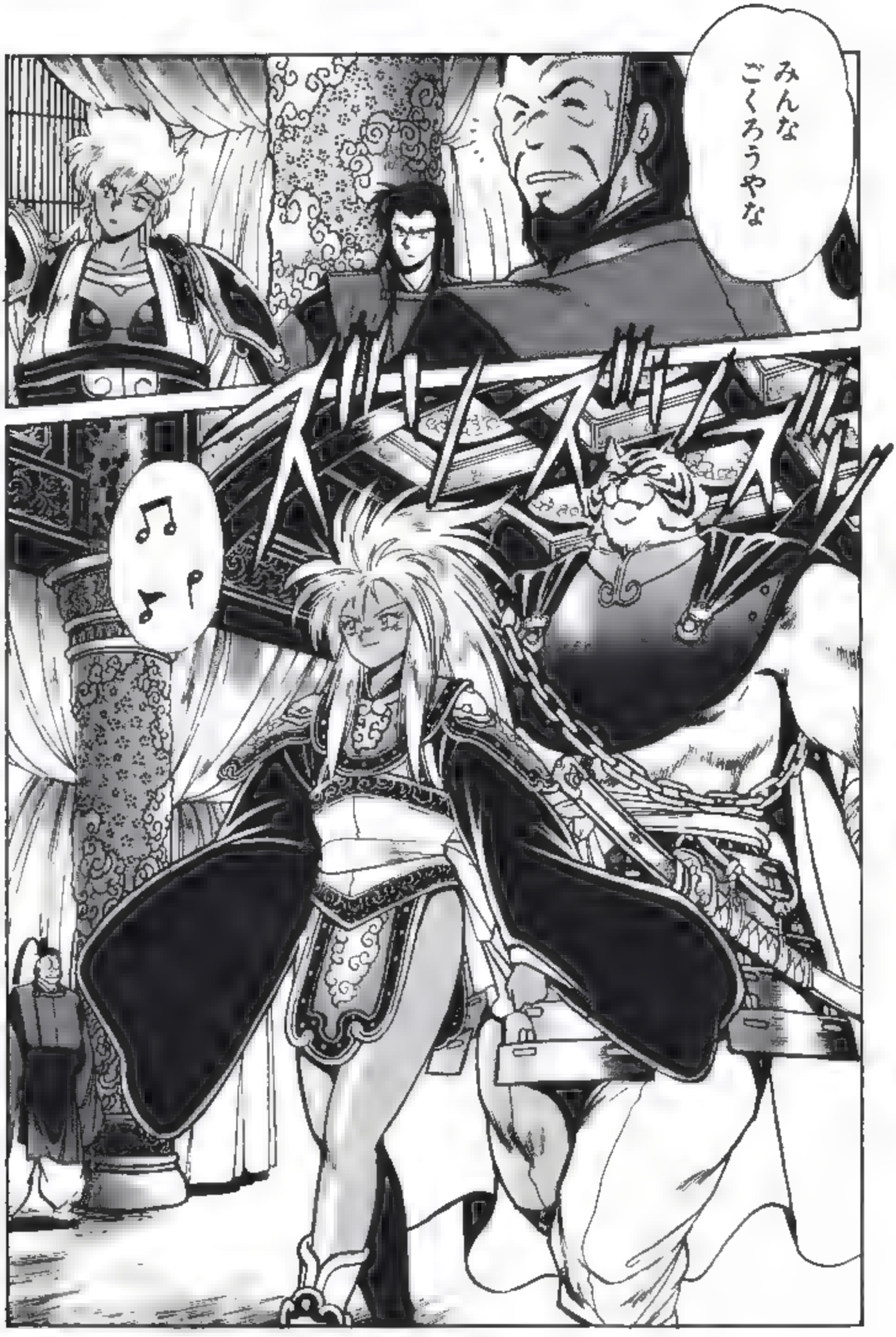
自分を
竜我様の
配下に加えて
くだされ!!
わたくし
竜我様の
名を聞いた時から
主君と仰ぐは
この方しか
おらぬと
思いました!
今までのことを
手みやげがわりにと
思いましてハイ!
二度と
あんな策を
弄するな!
いいな…!!

返事は!?
わ
わかりました
よし
おまえの
願い聞き
とどけた
ハハ
やっぱり
只者じゃ
ないな!!

やれやれ
血生臭い
男が
太守に
なったもんだな
おまけに
堅物ときた
賄賂の
何が悪い！
罪ばかりを
見て功をしらぬ！
新太守は若いから
そーいう
裏の経済が
イヤなんですね
ふん
秩序優先の
統制経済が
自分の首を
締めるとも
しらずに…
おろかな
ことだ！
おまえに身代を譲って
隠居生活をと
思ったが
あの様子では
そうもいくまい
ははは
兄さん
今頃
どーしてる
かな
スカ――――っ

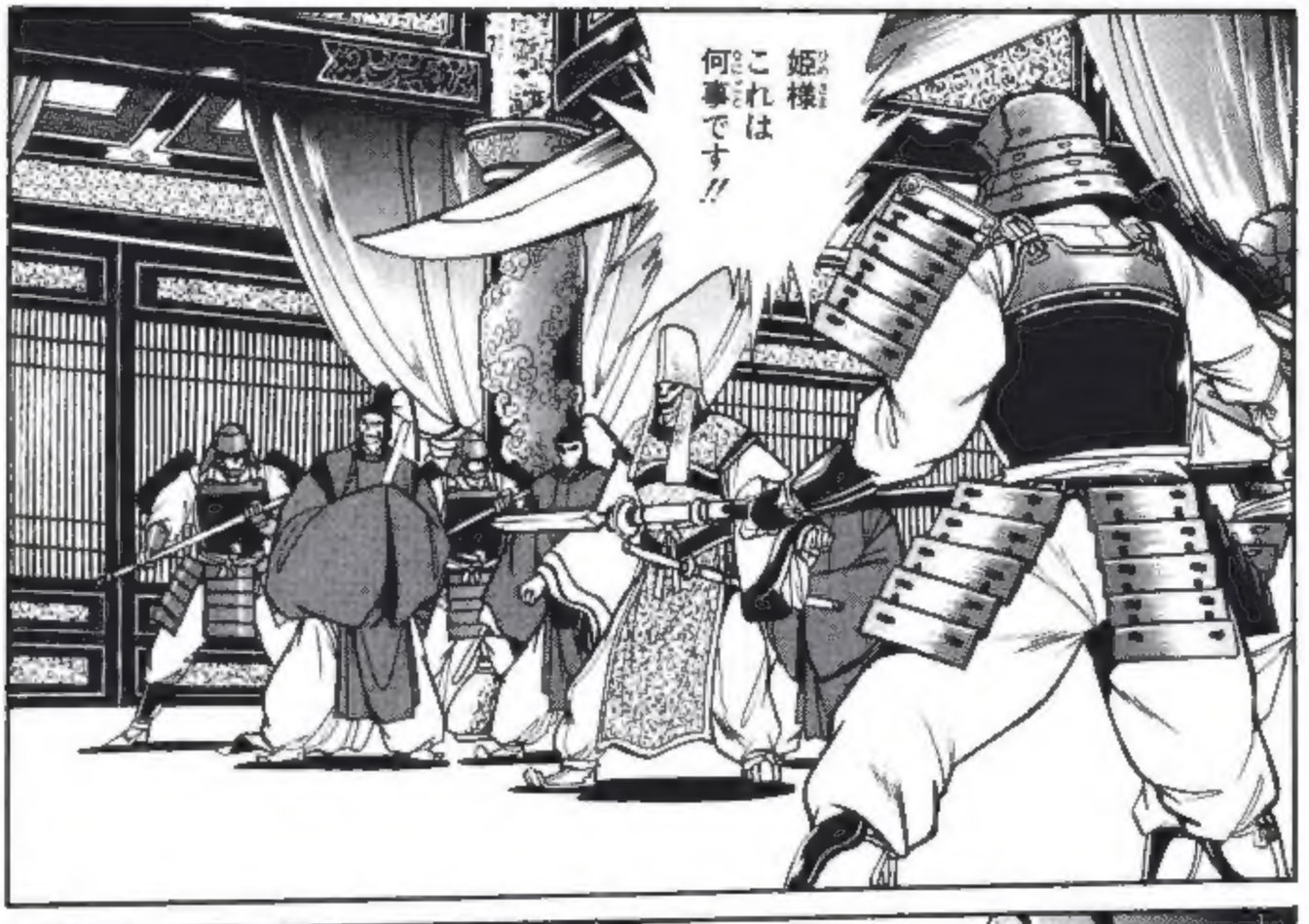
五丈武王都
ん？

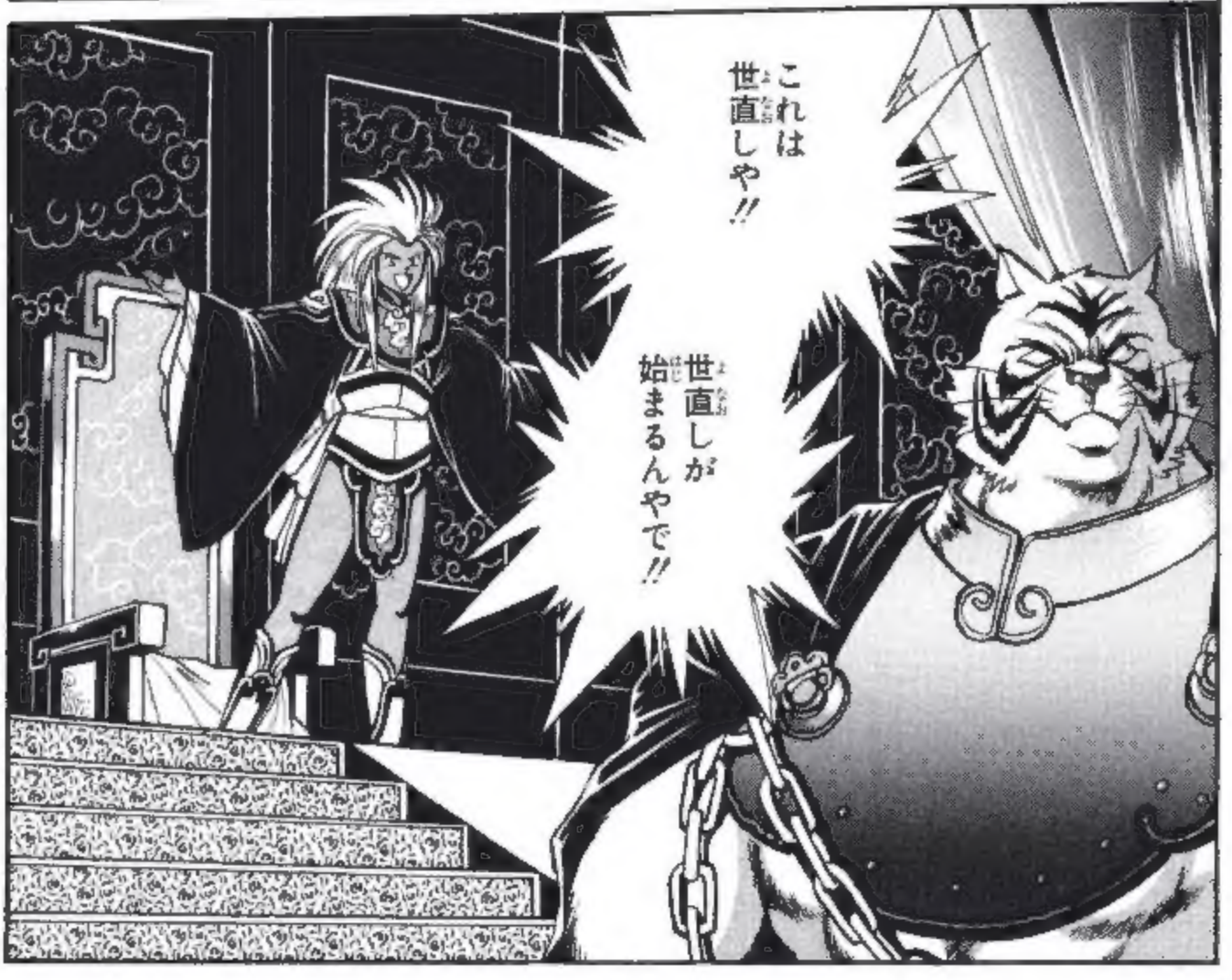
太政大臣閣下
このたびの
評議会召集
何事でございますかな？
なに？
はて？
わしは
鳳鳴殿の
提議がある故と
聞いておるが…
わしの？
いや
とんでもない
初耳じゃぞ！
玄偉
おぬしか？
いや
わたしは
関係ない
では
一体だれが…


みんな
ごくろうやな
ズーン
ズーン
♪♪

骸羅！
ひ・姫様
申しわけ
ありません
そのお席は：
わかっとる
父上の椅子や

すなわち
五丈の
支配者の
椅子っちゅう
ことやな！


姫様
これは
何事です!!


これは
世直しや!!
世直しが
始まるんやで!!

COMP COMICS DX

銀河戦国群雄伝ライ⑤

著者——真鍋譲治

1992年7月10日　初版発行

発行者——角川春樹
発行所——株式会社角川書店
〒102 東京都千代田区富士見2-13-3
電話03-3817-8521(営業)　03-5228-1731(編集)
振替口座　東京3-195208

装幀——朝倉哲也＋design CREST
印刷・製本——共同印刷株式会社
©JOJI MANABE 1992　　禁・無断転載・複製

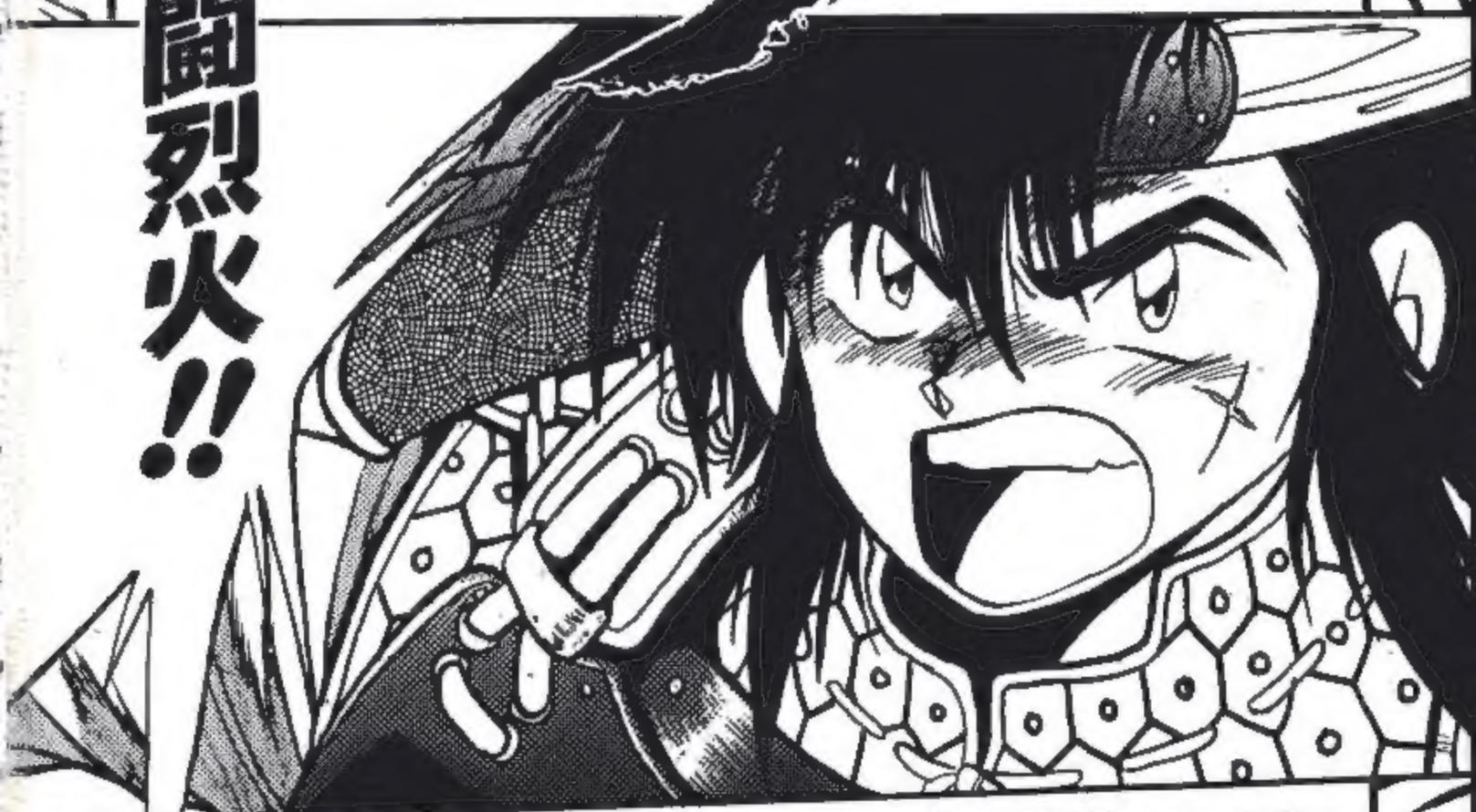
初出／月刊コミックコンプ91年8月号～12月号

落丁・乱丁本はお取り替えいたします
ISBN4-04-712022-7 C0379
Printed in Japan

銀河戦国群雄伝 ライ

コンプコミックスDX

激闘烈火!!



両竜相討ち!
新たな展開を迎え
銀河が燃える!!

真鍋譲治

A5判

1~5巻絶賛発売中!!

角川書店